

令和4年度 総務文教常任委員会 所管事務調査

アイヌ文化財出土品状況及び今後の取り扱い 別紙資料

作成：厚真町教育委員会 学芸員 乾 哲也

日時 令和4年7月19日(火) 午前9時30分～

場所 現地調査：厚真町軽舞遺跡調査整理事務所(字軽舞 205-2)

事務調査：厚真町役場(京町 120)

I アイヌ民族の歴史

A アイヌ民族とは

政治的立場

平成20年6月に国会衆参両院で「**北海道の先住民族**であることを求める」ことを認められた民族。また、平成31年4月に公布された「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」(アイヌ施策推進法)で「日本列島北部周辺、とりわけ北海道の先住民族」と明記された人々。

空間的領域

北海道、本州東北地方、サハリン、千島に住んでいた先住民族。

時間的領域

本州の稲作文化の弥生文化の時代以降、北海道の文化として**続縄文文化の時代、擦文文化の時代**と呼ばれ、**これらを育んだ縄文人の末裔**とされています(縄文人そのものとは違う)。**直接の先祖となるのは、直前の擦文文化の人々とされ、特に10世紀以降の擦文文化の後半は研究者によっては「擦文-アイヌ文化」と表記されています。**ただし、広大な北海道では擦文文化の時代に一部並存する**北方系渡来民族のオホーツク文化(7～9世紀)**の人々の影響もあり、特に網走・釧路・根室方面は混血が進んでいると思われます。

しかし、直接の祖先とされる擦文文化人や古い時期のアイヌ民族のお墓、人骨の発掘例が極端に少ないことから、**形質人類学的な検証からの“民族の出自”については未だ不明な点が多いのが現状です。**

近年では、DNA分析から縄文人や現代の和人とは異なる要素もみつきより、オホーツク文化人との接触が強く残った民族とわかってきました。

アイヌとは

民族名称の「**アイヌ**」とは彼らの言葉で「**人間**」という意味。特に人徳をもった男性には「**～イン**」と呼ばれているのも「**アイヌ**」に起因する呼称です。「**人間**」という意味には**生物的な「ヒト**」とは違い、**人格を伴う大切な言葉**です。

ちなみに、民族的意識は他者との違いを認識し、自らを意識するものと思います。本州から来た「**和人**」を「**シサム**」(自分たちの隣人)と言います。一般的に聞く言葉で「**シャモ**」は蔑視的表現とされています。**お互いが尊重しあって共により良い未来を築くためにも、一つ一つの言葉の意味を理解する、考えることは大切なことです。**

B アイヌ文化とは

言語・精神・道具類から本州の和人文化や大陸の諸民族文化とは異なるアイヌ民族の文化です。言葉では主に北海道の言葉「**アイヌ語**」として広く知られています。特に、

北海道内の地名やサハリンの旧地名は**アイヌ語地名**がほとんどで、東北地方にも散見でき、私たちの身近なところにあります。また、**文字を持たなかった**という大きな違いもあります。しかし、**カムイユカラ（神謡）やウウェペケレ（説話）、ヤイサマ（叙情歌・即興歌）**などの口承文芸が伝わっています。主に祖母などから孫へ、普段の生活の中で**幾世代も語り伝わってきたもの**と思われるます。

物質文化、道具からみると直前の擦文文化との大きな違いは縄文時代以来、長く使われてきた**煮沸容器としての土器から鉄の鍋**に変わったことです。また、利器も前段階の擦文文化期には**石器から鉄のナイフ**に変わります。住まいも一般的に擦文時代までは**竪穴式住居**に住んでいますが、アイヌ文化では**平地式住居（チセ）**となります。また本州の板壁、土壁や角材は使用されておらず、地域素材のヨシやササ、シラカバなどの樹皮や丸太が使われています。

ただし、アイヌ文化は様々な**金属製品、漆器、ガラス玉**など自分たちでは生産できない**モノ**を多量に取り込んでいます。**周辺の民族との交易**で手に入れた品々で、アイヌ民族の力だけで、アイヌ文化が成立していたわけではありません。これらの品々を自分たちの嗜好や北海道の自然に合うように、**アイヌ民族なりに組み上げてきたもの**が「アイヌ文化」です。

C アイヌ民族の歴史とは

北海道では**擦文文化の終焉（12世紀末～13世紀初頭）以降、明治時代までをアイヌ文化の時代**とされています。**約650年間の長い時代**です。この長い時代の中でも当時の社会情勢により変容していることが分かっています。17世紀以降は和人の一方的な支配に近い状態となってきます。しかし、アイヌ文化の歴史、特に擦文文化からアイヌ文化への成立期などの古い時代については、ほとんど分かっておらず、**空白の歴史、ミッシング・リンク**と言われています。

では、**アイヌ民族・アイヌ文化の歴史**を調べる方法として大きく2つの方法があります。1つは、和人が書き残した日誌や絵画などの記録を紐解く**文献史学**というものです。しかし、これらの記録は北海道に限ってみると17世紀（江戸時代中期）以降のものが主からで、300年前くらいまでしかたどれません。しかも和人が残したものであり、客観性に乏しい場合があります。

もう一つは**考古学**からの再構築です。土の中に残った遺構や遺物が資料で、年代的には古い時代から連続的に調べることが可能です。ですからアイヌ文化の成立期（13世紀ころ）も調べることができます。ただし、アイヌ文化期の考古資料は年代決定ができる資料が数量的に乏しく、また、年代の確定は火山灰からの**層位学的方法**での大まかな年代に限られてしまい、未だ不明な部分が多くありました。近年は**炭素年代測定法**の精度が向上し、発掘調査に盛んに取り入れられるようになり、古い時期のアイヌ文化期についても少しずつ分かってきました。

しかし、考古学の資料は客観性がやや高いものの**アイヌ民族の物質文化の一部**が残されているに過ぎません。特に精神文化については、推察の域を脱しえません。より実像に迫る検証の過程で、**文献史学や民俗学の研究成果、現在のアイヌ文化・伝統技術や儀礼の様子も援用**することが多々あります。

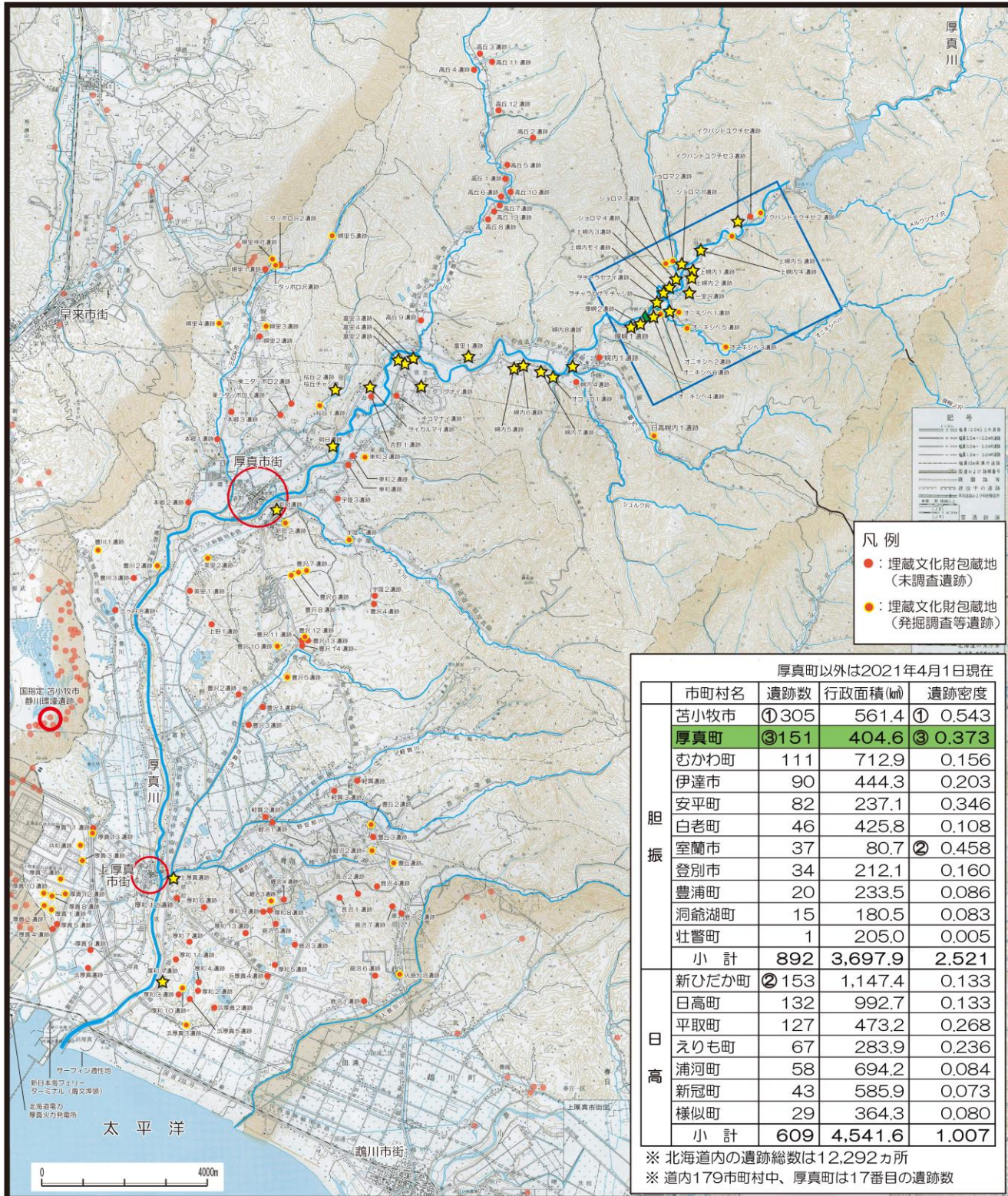
II 厚真町の近年の発掘調査から見てきたアイヌ文化

厚真町内の埋蔵文化財=151ヵ所（胆振日高管内で3番目に遺跡の多い町）

先史時代より人が住み良い地域 = 地形・気候・動植物・ルート

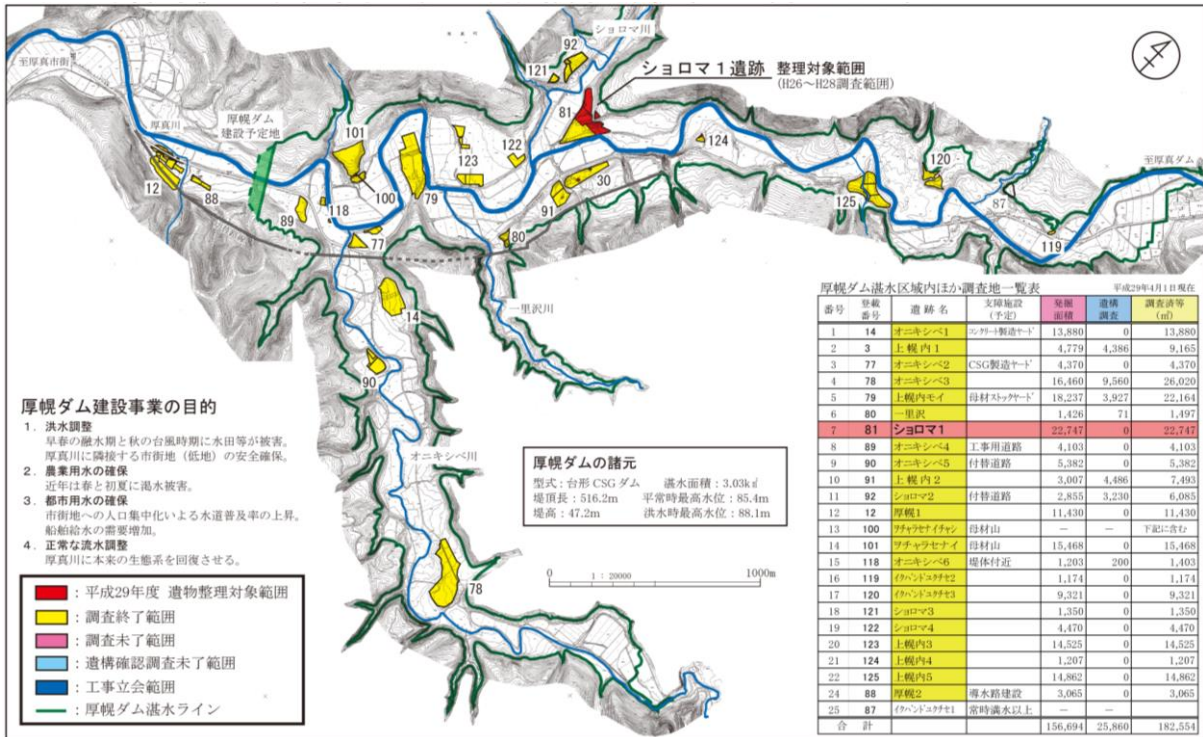
厚真川上流域（支流他も含む）に遺跡数が多い。他の市町村にはほとんどない特徴。

= 縄文時代からの山越えのルート上の遺跡 → 現代も昔も行き止まりには人が集まりにくい。



厚真町の遺跡分布図（★印はアイヌ文化期の遺跡）

平成 14 年度から厚真川上流域での厚幌ダム建設事業に係わる埋蔵文化財発掘調査
 = 珍しい山間部における遺跡の全面発掘調査 (15 年間の発掘調査)
 厚真町内の遺跡分布図 (☆はアイヌ文化期の遺跡)



厚幌ダム水没地域内の埋蔵文化財包蔵地分布図

A 厚幌1遺跡 15世紀代 (平成14・15年度調査)

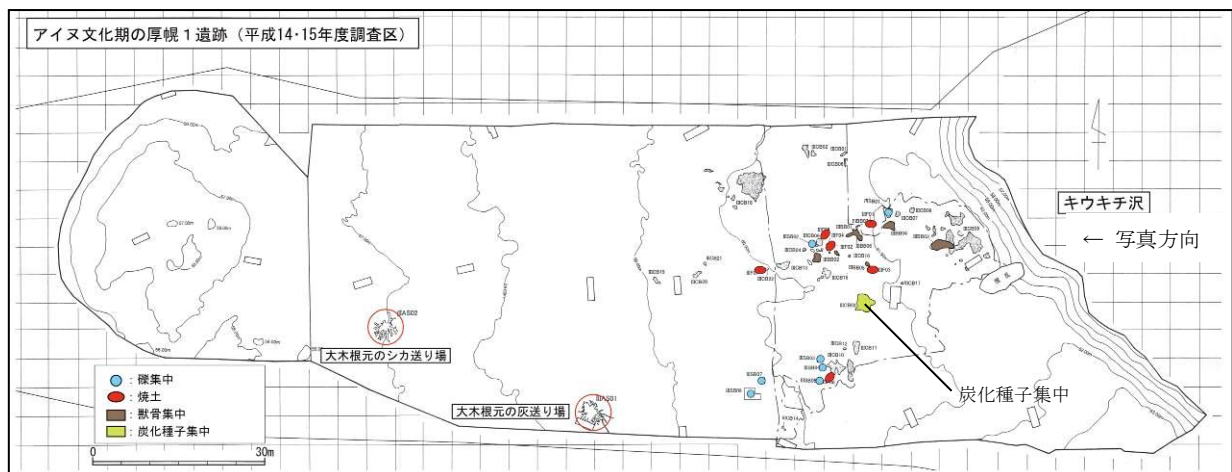
遺構類：焼土、礫集中、獣骨集中、炭化物集中

遺物：内耳鉄鍋、星兜片、刀子、鉤状鉄製品、棒状鉄製品、礫、炭化種子、獣骨ほか
 特記事項

新たな調査成果等 (平成15年時点)

- ・厚真町内で初めてのアイヌ文化期の遺跡発掘調査。
- ・発掘調査着手中に発見 → アイヌ文化期の遺跡の発見は難しい。
- ・炭化物集中 **国内最南端の北方系の短粒形裸性オオムギ (14世紀)**
- ・大木に伴うシカ送り場跡の発見 (17世紀中葉)

平取町亜別遺跡に続く2例目の発見。現在のアイヌ文化にはシカは「送り儀礼」の対象外の動物と言われていた。→ アイヌ文化の変容



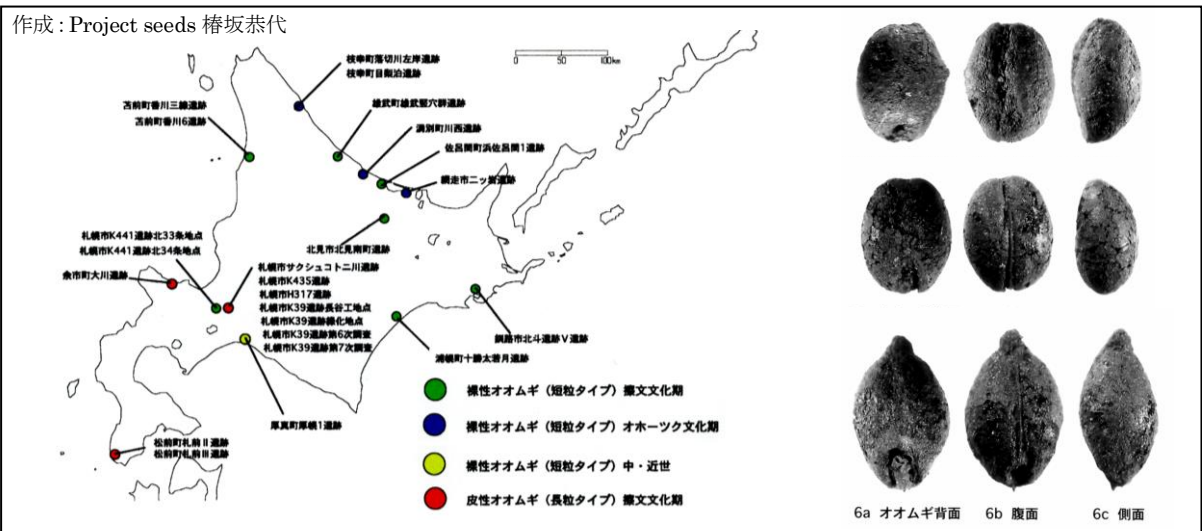
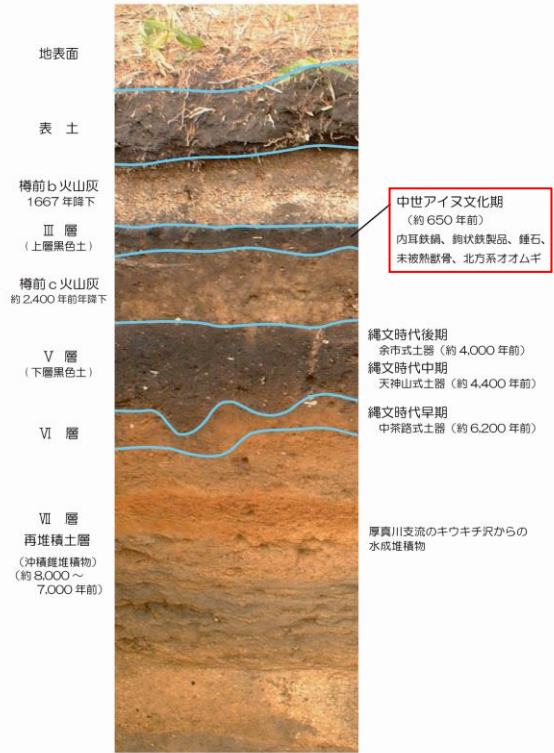
厚幌1遺跡の遺構配置図

厚幌1遺跡 基本層序 (平成14・15年発掘調査)

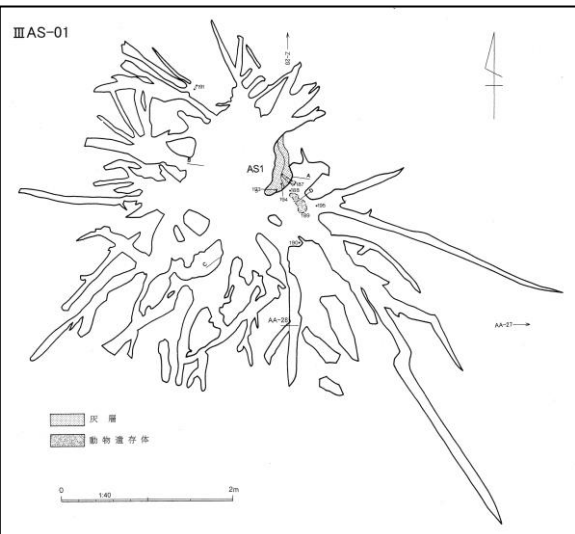


上：厚幌1遺跡近景

右：厚幌1遺跡の基本土層



先史時代のオオムギの分布図 (左) と厚真町内の短粒形裸性オオムギ (右)



大木の根元から出土したシカの頭骨片 (鹿角)

樽前b火山灰 (1667年降下) 下の大木の根跡

B 上幌内モイ遺跡 13世紀初頭～16世紀末葉 (平成16～19年度調査)

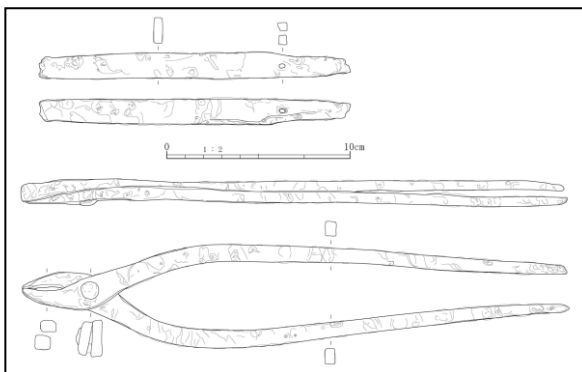
※ 擦文文化中期から後期にかけても多数の遺構、遺物を検出。

遺構類：平地式住居跡 10軒、土坑墓 3基、焼土、灰集中、鉄器集中、礫集中、獣骨集中ほか
 遺物：内耳鉄鍋、金鉗、刀剣類・刀装具、鉤状鉄製品、漆器、ガラス玉、礫石器、骨角器類、
 礫、炭化種子、獣骨ほか

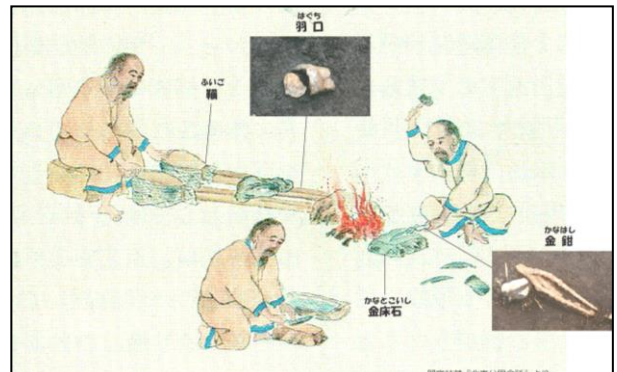


特記事項

- 炭素年代測定を積極的に取り入れ、発掘調査段階の層位的所見と検証した調査例。
 → より確実的な遺跡形成年代と約400年間続いたコタン（集落）跡。
- アイヌ文化期初期（AD1200年頃）から400年間続いた山間部のコタン
 → これまで発見例が殆どない。擦文からアイヌへの“ミッシング・リンク”に迫る時期。
- 道内最古の金鉗（かなはし・12世紀後半～13世紀前半）と加工途中の鉄製品
 → 盛んに行われていた金属加工 = 自分たち仕様の道具（鉤状鉄製品に多い痕跡）



道内最古の金鉗と刀子素材鋼

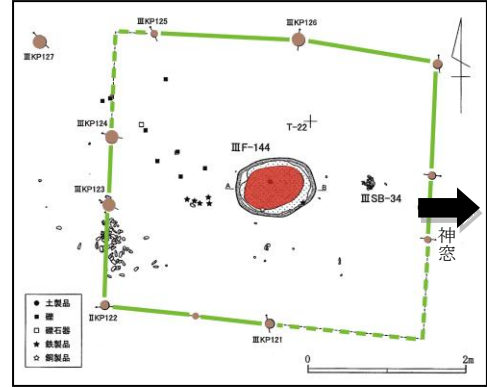
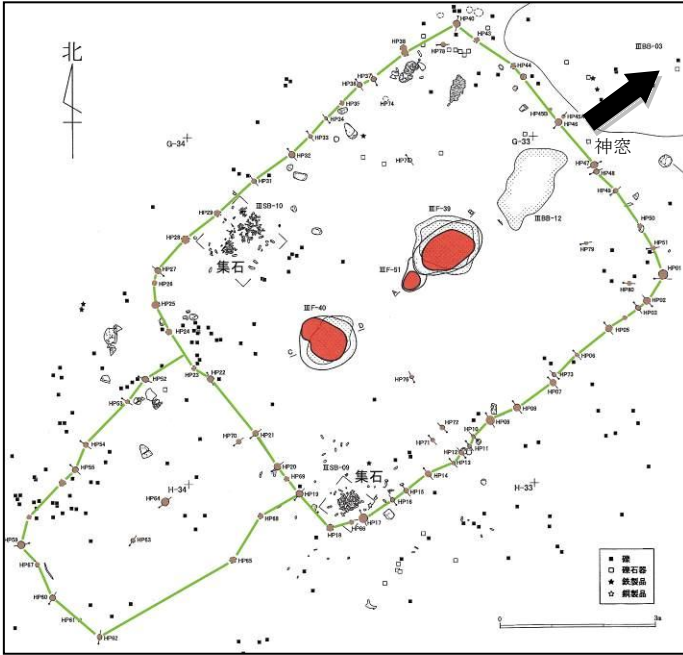


樺太アイヌの鍛冶（間宮林蔵）

- ・多量の礫石器（これまでのアイヌ文化期の遺跡ではほとんど注目されていない）
→ たたき石や滑沢面のある礫（作業台）＝ 豊かな生業活動・加工方法。

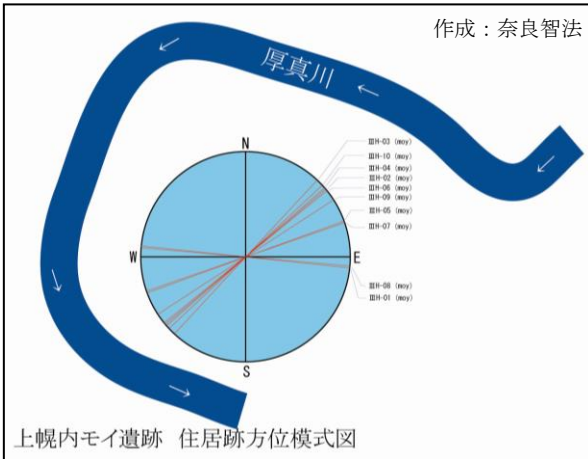
民俗調査成果の検証と新たな側面

- ・集落内での住居（チセ）跡の長軸方向の変遷が追える → アイヌ文化の変容が分かる。
カムイの国々の方角（民俗方位）
：厚真川上流（十勝アイヌの民俗例）→ 東方（現在の白老・平取の民俗例と同じ）
- ・住居小型化 ＝ 規模と合わせて、炉が1カ所となる。



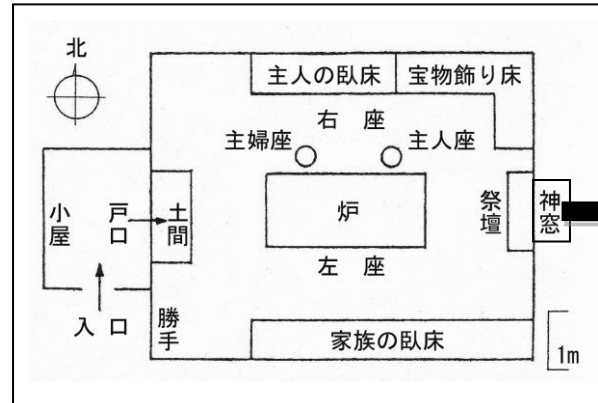
上：上幌内モイ遺跡 8号住居跡
（約400年前）
左：上幌内モイ遺跡 2号住居跡
（約700年前）

2軒の母屋部分を比較しても年代により小型化しています。



上幌内モイ遺跡 住居跡方位模式図

モイ遺跡の住居跡の長軸方向（800～400年前）



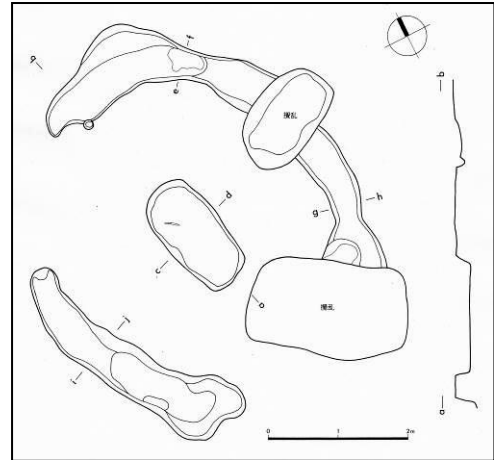
近代のチセ内部の配置（知里真志保著作集3より）

上幌内モイ遺跡では10件チセ（平地式住居）跡が確認されている。このうち、約800年前以降の中世アイヌ文化期のチセ跡は南西－北東軸で、厚真川の上流方向を意識していた。しかし、中世末期（約450年前）から近世初頭の2軒のチセ跡は東－西軸となっている。また住居跡の規模も小型化しており、核家族化が一時的に進んだ可能性もある。1つの遺跡、コタン跡での長い年月にわたる営みからの構造変遷は、他の遺跡との比較検証にも留意すると、社会構造の変遷を検討できるものと思われます。

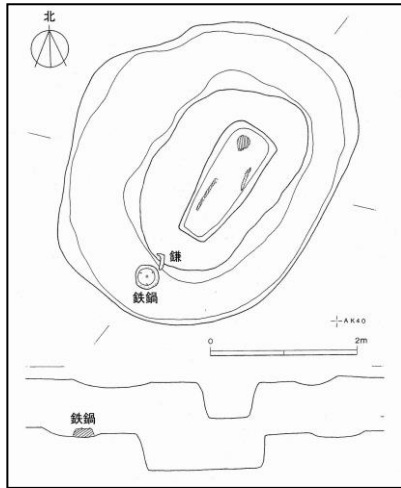
- ・約 450 年前のお墓 → 平取・千歳・恵庭と同じ構造のお墓 = 同一文化圏の追検証。
近代の墓標形態からの地域集団分布域と重なっている。
- 1 号墓副葬品の蝦夷太刀の鏢には銀装飾。



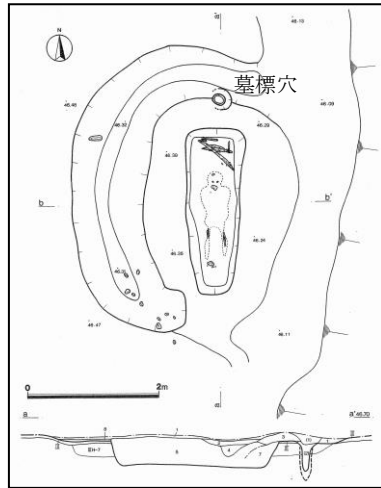
写真：上幌内モイ遺跡 1号墓



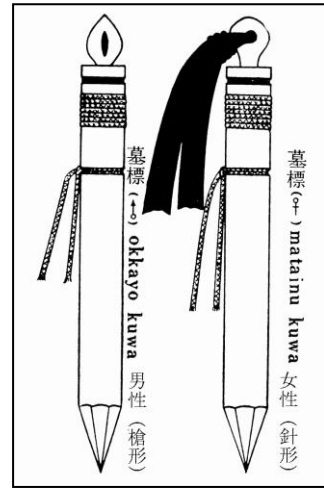
恵庭市中島松 7 遺跡



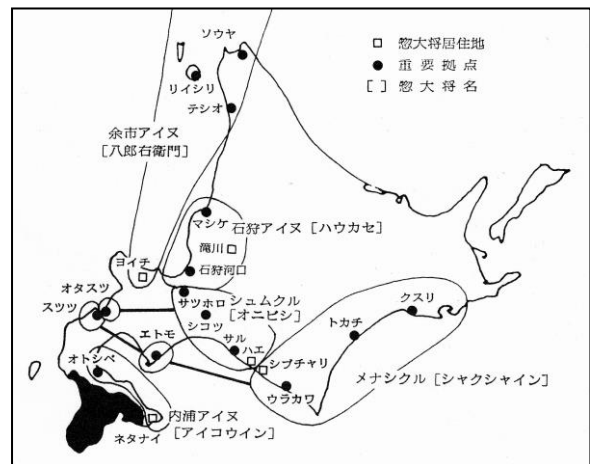
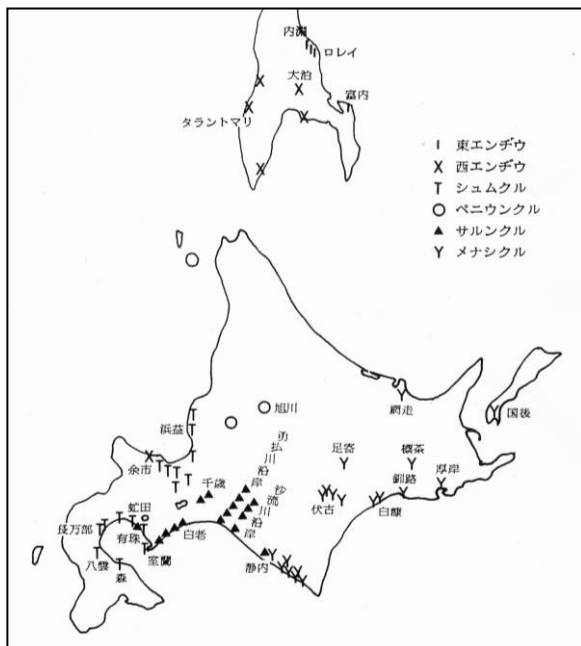
千歳市梅川 4 遺跡



平取町二風谷遺跡（上流方向） 近代の墓標（平取町）



「アイヌ民族誌」より



左：近代の墓標形態の分布図

「墓標の型式より見たるアイヌの諸系統」より

上：寛文年間（1661-72）のアイヌ地域集団

「シャクシャインの蜂起と英雄時代の論理」より

・18世紀後半以降の「アイヌ絵」との照合 → 考古学からの歴史の追検証。

住居跡：14世紀初頭(700年前)から今と同じ住居形態(2号住居跡)

平面系が長方形の母屋にセム(出入口兼倉庫)や柱の外踏ん張り構造

灰集中：16世紀の灰送り場跡

穂摘み具：16世紀の1穴のカワシンジュガイ

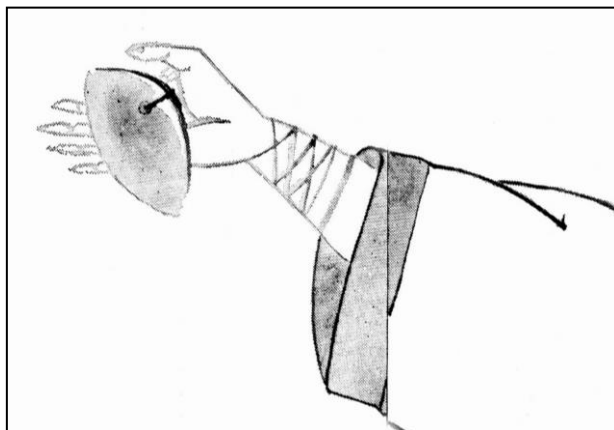
※ 参考図書「蝦夷生計図説」(1823年)



和人が描いた平地式住居(チセ)



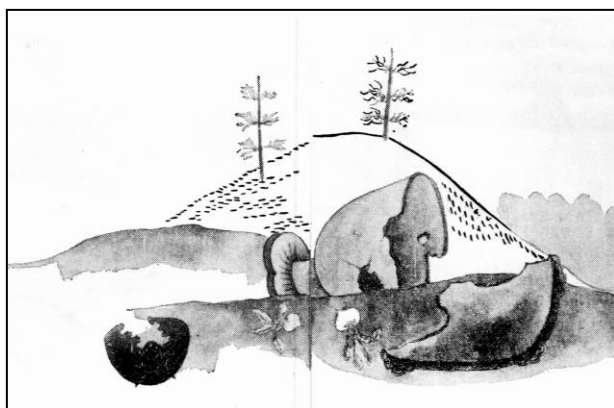
粟畑での収穫作業



二枚貝を利用した収穫具



上幌内モイ遺跡出土のカワシンジュガイ製の1穴の穂摘み具。灰集中1 (AMS法 C14年代: 約500年前)



物送り場(手前)と灰送り場(奥)
灰送りにはイナウが立てられている。



上幌内モイ遺跡の灰集中1

灰送り跡は考古学の発掘調査において「灰集中」として確認されています。また、物送り場跡も複数種類の出土品がまとまって見つかる「遺物集中」としてニタップナイ遺跡(17世紀前半)、オニキシベ4遺跡(12世紀)、上幌内モイ遺跡(11世紀)で発見されています。

上幌内モイ遺跡の擦文文化期の調査成果（アイヌ文化成立直前期の様相）

白頭山苫小牧火山灰降下以降の擦文中期後半から後期（10世紀後半から12世紀）が主体。

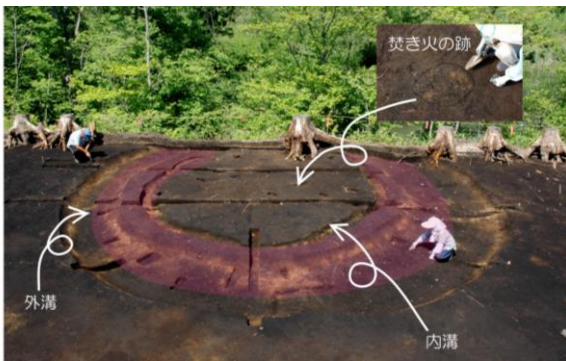
- ・謎の遺構（円形周溝遺構）：**同じタイプの遺構検出例はない。**

規模形態：直径10m。幅1～2mの浅い溝と盛土で円形に区画→アイヌ文化のチャシの祖形？
 内郭は整地され、焼土が1ヵ所。伴う遺物は朱塗りの巻貝化石1点と多量の炭化種子（ヒエ・キビ・ブドウ・サクランボなど）のみ → 非日常の場＝祭祀場跡。
 ※溝は俗世界との「結界」の意味＝神聖な場所

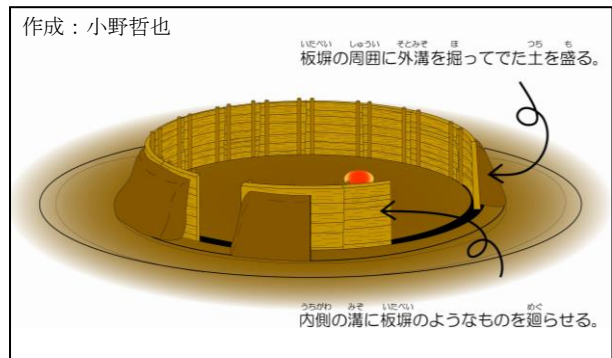
類似遺構＝平取町カンカン2遺跡：墓説、祭祀場跡説、金属製品再加工関連施設跡説
 上幌内モイ遺跡と同時期

＝乙部町小茂内遺跡：祭祀場跡説 火山灰より上幌内モイ遺跡より古い時期

＝厚真町富里2遺跡：祭祀場跡。段丘縁辺部を同規模の溝で弧状に区画



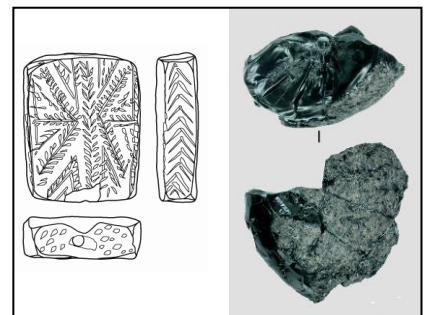
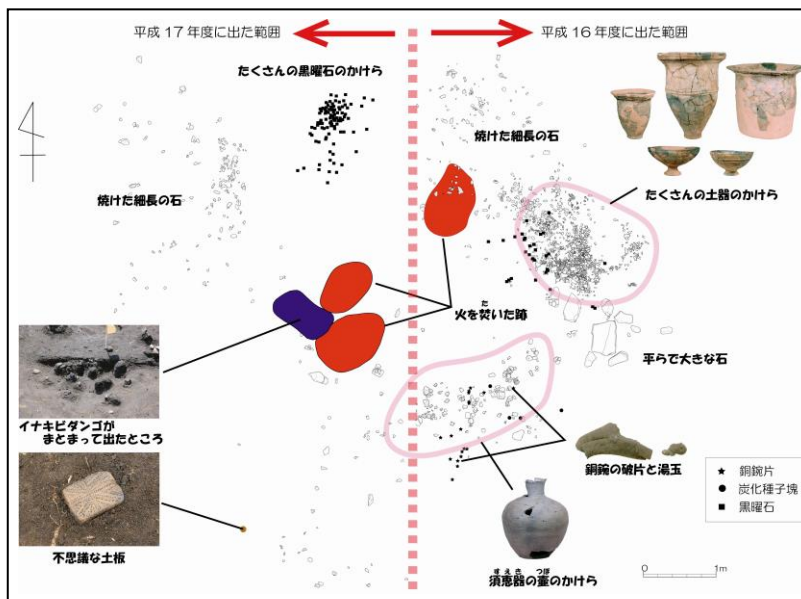
円形周溝遺構



円形周溝遺構の推定復元図

- ・祭祀場跡の発見（集中区1・2）：焼土と多種多量の被熱破碎遺物 → **道内初事例。**

この時代の儀礼場跡と思われる検出例はほとんどない → 貴重な精神文化面の資料
 アイヌ文化の儀礼・精神文化成立を推察するうえでも極めて重要な資料。



左：集中区1の儀礼場跡

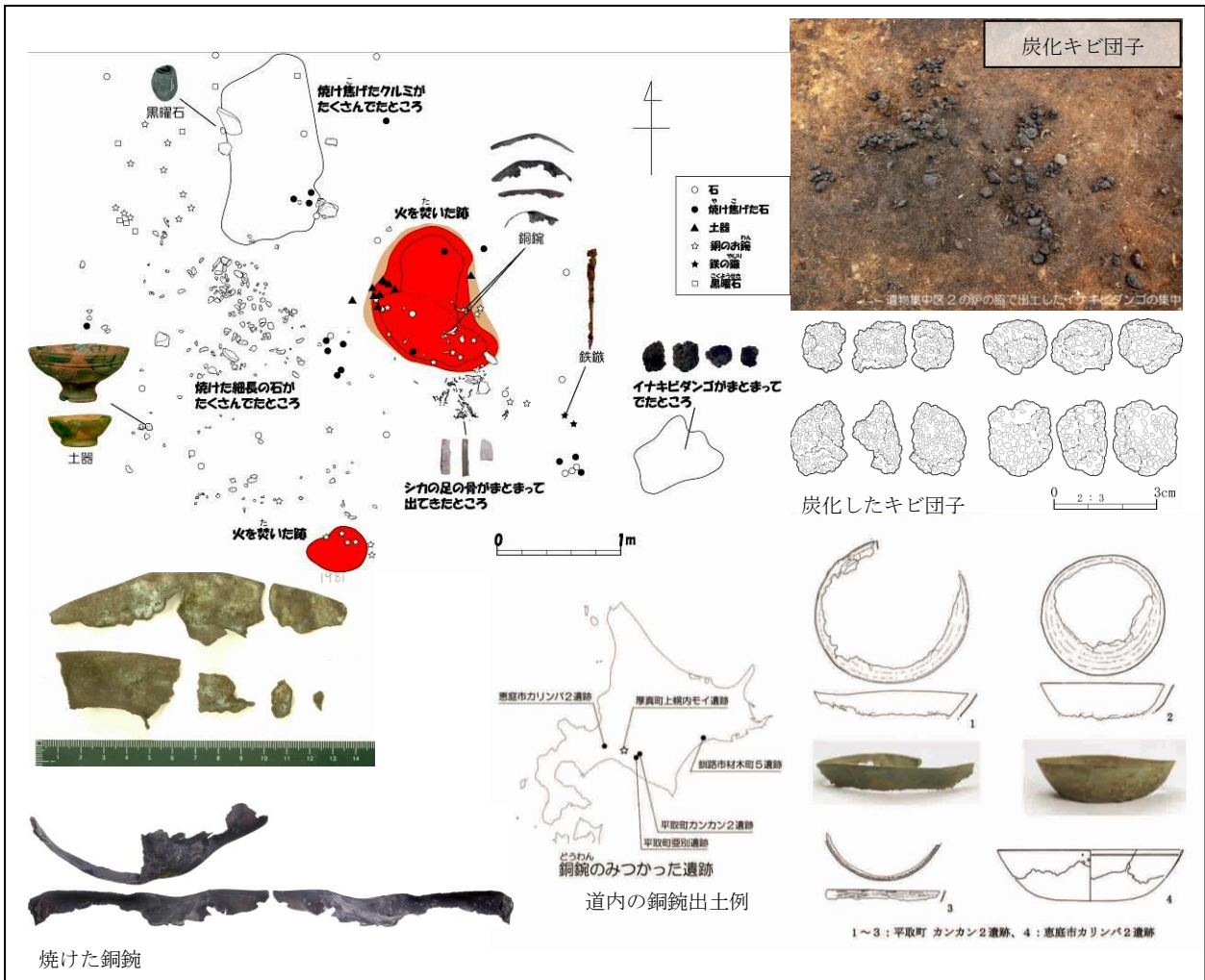
上左：板状有孔土製品

道内初出土の遺物

⇒ 非日常的な道具。

儀礼場跡1（集中区1：約1,000年前） 焼土を中心に各種の遺物が出土

- ・破碎後に火を受けた擦文土器や五所川原産須恵器、炭化キビ団子、被熱破碎の銅鏡、被熱破碎の黒曜石転礫、被熱した棒状礫、炭化種子（クルミ・ブドウ・キビほか）



儀礼場跡 2（集中区 2：約 1,000 年前） 焼土を中心に各種類の遺物が出土。

- ・ 破碎後に火を受けた擦文土器や炭化キビ団子、銅鉢、黒曜石転礫、板状礫、シカの中手・中足骨、炭化種子（クルミ・キビほか）
- ・ 道内 5 例目の“佐波理鉢”（さはりわん：朝鮮半島産の銅鉢）→ 貴族や高僧のみが使用。
- ・ 道内初の有孔板状土製品 → 非日常製品。
- ・ 擦文土器や須恵器の変色 → 完形土器を破碎し焼土へ投棄。
- ・ 黒曜石転礫 → 被熱破碎。金属利器の時代に黒曜石は不要の代物。
- ・ 炭化イナキビ塊 → **全国初出土**。粒径 2～3 cm 程度の団子状の塊。まとめて出土。

この他単体の被熱キビ粒の出土。

- ・ 棒状に裁断加工されたシカの中手・中足骨 → 全て被熱。通常は骨角器加工素材。
- ・ 被熱した礫群 → 他の集石では見られない被熱した状態。

この時代からアイヌ文化期の古い時期にかけての儀礼行為の痕跡は、発見例が限られ、精神文化は不明な点が多い。＝アイヌ文化の精神文化がいつ頃に成立したか重要な手掛かりとなる発見。また、広く「文化」を考える意味では、考古学の「物質文化」のみでは、歴史復元の片手落ちであり、**その時代の人々の生活スタイルの根幹を成す「精神文化」（アイデンティティー）は極めて重要な情報**となります。

- ・土坑墓の検出、埋葬姿勢が判別できる人骨を伴う。

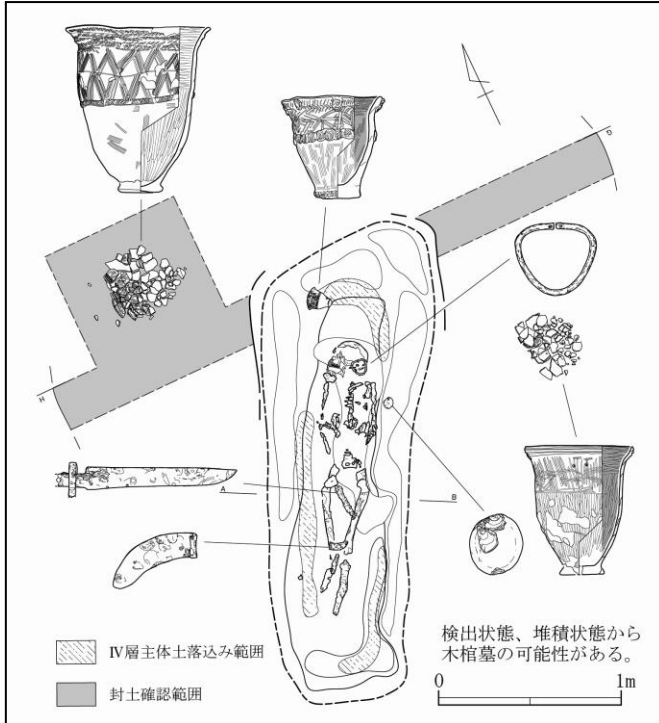
→ 副葬品に擦文後期の土器と刀子、鎌、環状鉄製品、黒曜石転礫 → 木棺墓の可能性。

重要なキーワード 黒曜石転礫

11・12 世紀の擦文の儀礼場跡、土坑墓から出土
13・14 世紀のアイヌ墓から出土



擦文からアイヌ文化期受け継がれる
精神文化要素



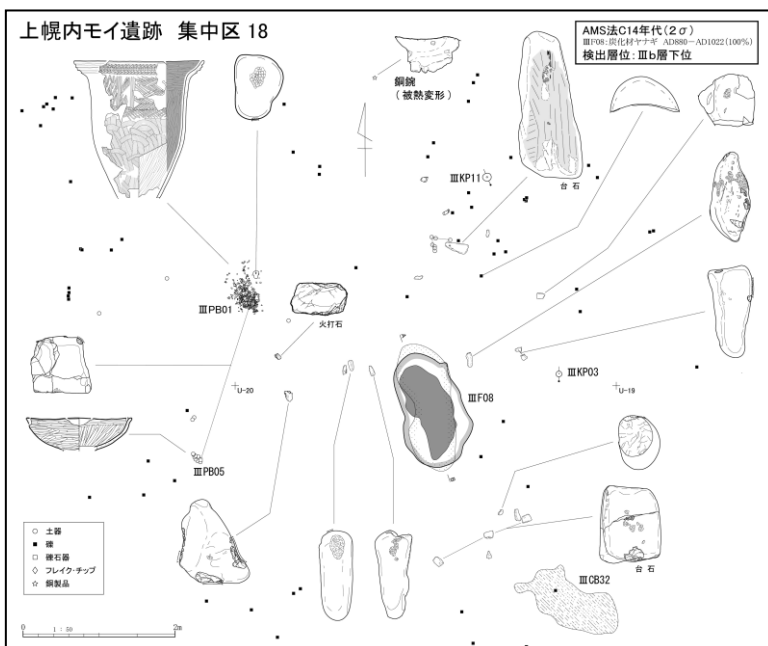
墓坑内出土の小型土器と黒曜石転礫

3号墓副葬品出土状態

- ・祭祀場跡と作業場跡の分布域の違い

→ 祭祀場跡は厚真川上流側の段丘縁辺部。作業場跡は厚真川の下流側へ連続する。

= 厚真川の上流を意識している点は、古いアイヌ文化期から読み取れる精神文化面と一致。



比較項目	集中区1・2他	集中区3・18他
	非日常的(儀礼様相)	日常的様相
分布	厚真川上流に面した範囲に集中する。	左記以外の全ての範囲。
焼土		
焼骨片	ほとんど含まない。	獣魚骨をやや多く含む。
その他の遺構	特に無い。	
遺物		
分布	密集度が高く出土。もしくは皆無に近い。	個体毎の集中があるものの散逸した状態で出土。
構成	銅鍔、炭化キビ塊、板状土製品、被熱中手・中足骨、黒曜石転礫など特異な遺物が多い。	たたき石や台石が多く出土。金属製品では刀子が多い。
遺物状態	破砕後、二次被熱のものが多い。	特徴的なものはない。

儀礼場跡と作業場跡の属性比較表

作業場跡 焼土には焼骨片を含み、台石やたたき石が周辺より出土している。火打石も出土。

・本州系遺物の流入

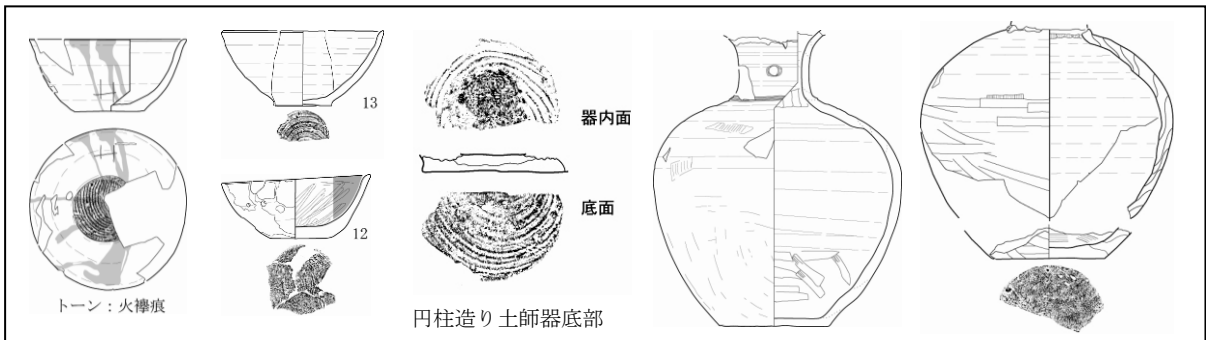
多数の鉄製品 → 山間部でありながら活発な交易活動 = 安定的な物流ルート

土師器・須恵器の出土（円柱造りの土師器は**道内初発見**。）

須恵器は壺（5個体）や土師器坏の出土のみ。他の遺跡は甕の出土が目立つ。

→ 物流形態の違い。小型の壺などは徒歩での搬入、大型甕は丸木舟による搬入か？

松浦武四郎の記録でも厚真川は倒木が多く、舟を利用していない。

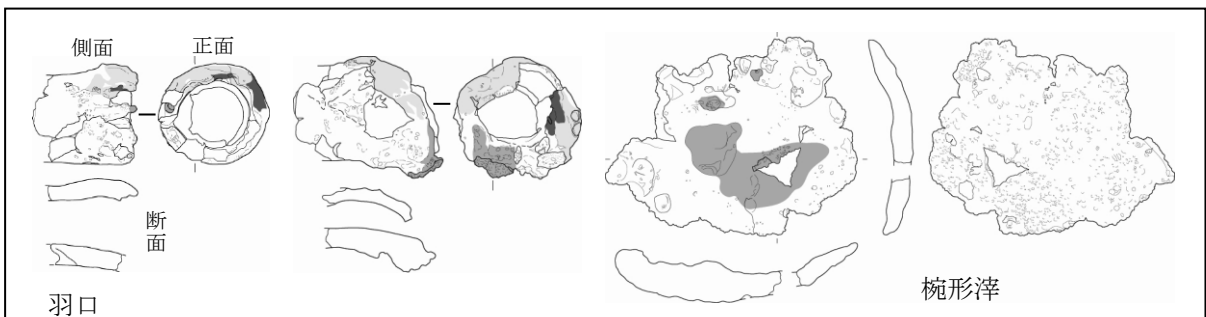


土師器と須恵器 土師器はロクロを用いて製作されるため、底面にロクロ回転台から切り離す時の糸切痕が残る。

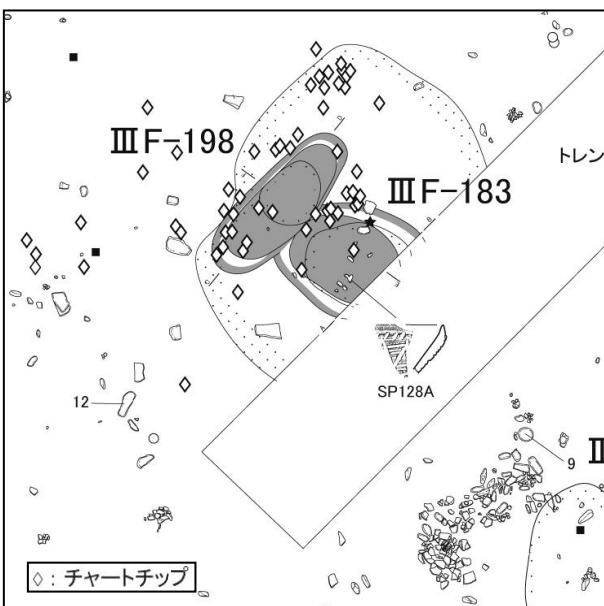
技術（知識）の流入 → 人の渡来

廃滓場跡の検出 → 鍛冶関連遺物の出土（規模形態的に鉄器の再加工を行う小鍛冶規模）

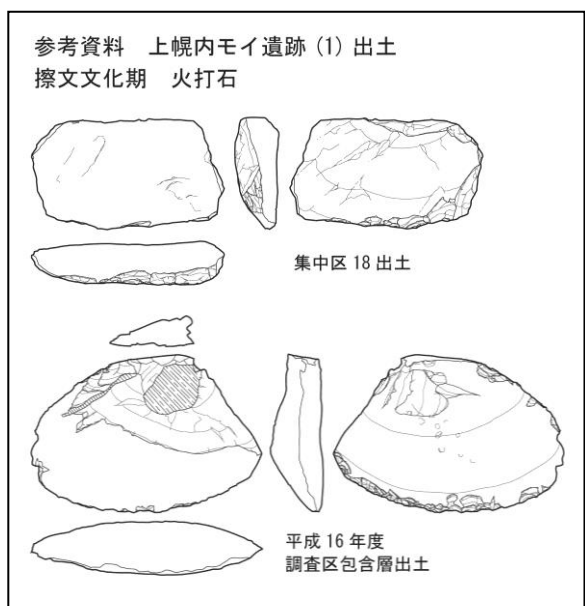
火打石、火打石碎片の出土 → 火花式発火法の伝播（**道内最古の火打石** = 最新の技術）



ふいごの羽口と椀形滓（鍛冶行為の証拠）

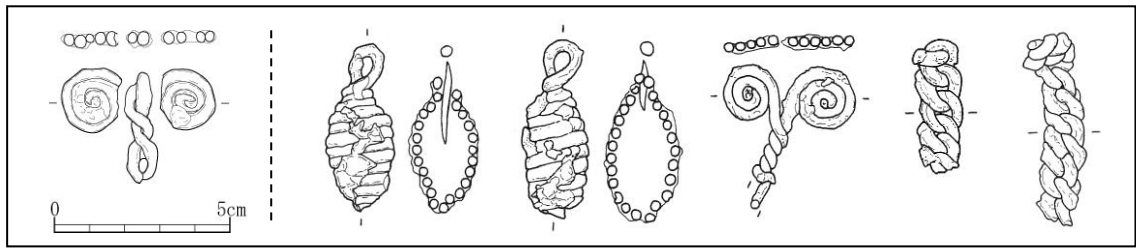


火打石のカケラが出土した焼土



道内最古の火打石（チャート製）

- ・大陸系資料の出土 = 裸性短粒オオムギの出土 = 道内最南端
= コイル状装飾品や鎖状鉄製品の出土



左：上幌内モイ遺跡のコイル状装飾品渦巻双頭部 右：平取町二風谷遺跡

- ・多量の出土遺物 擦文文化期の出土遺物点数は約 49,150 点。

竪穴式住居跡は1軒も検出されず、新たな課題となった。

これまでも千歳市美々8遺跡台地部でもすでに指摘されていた。擦文後期の謎。

→すでに平地式住居に変化。古い時期の住居跡のため、調査者の先入観により発見されていなかったのか？ ⇒ 今後の発掘調査方法の課題。

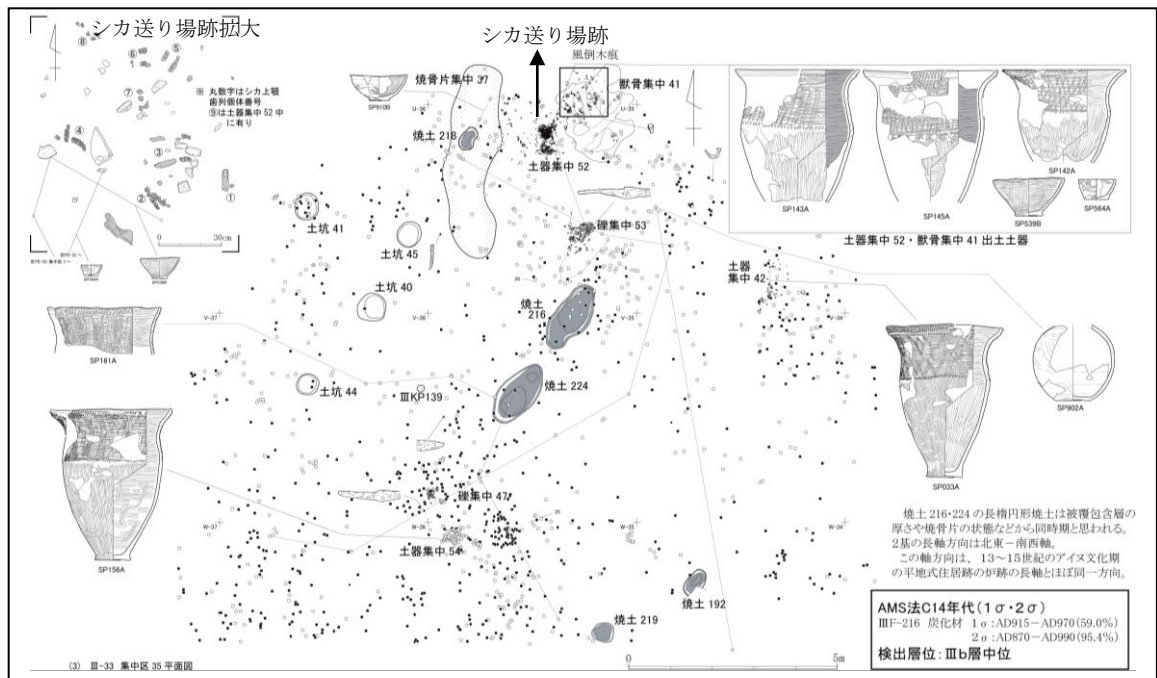
上幌内モイ遺跡の擦文文化とアイヌ文化について

- ・大切な方角（民俗方位）

全体的な遺構配置は異なるが、精神文化面での重要な方角は厚真川の上流を意識する点では一致する。

- ・住居跡？の形態

擦文文化期の焼土と古いアイヌ文化期の平地式住居跡の炉跡の長軸方向、形態が一致。



擦文文化期の日常領域（長楕円形焼土とシカ送り場跡）

- ・盛んな交易活動

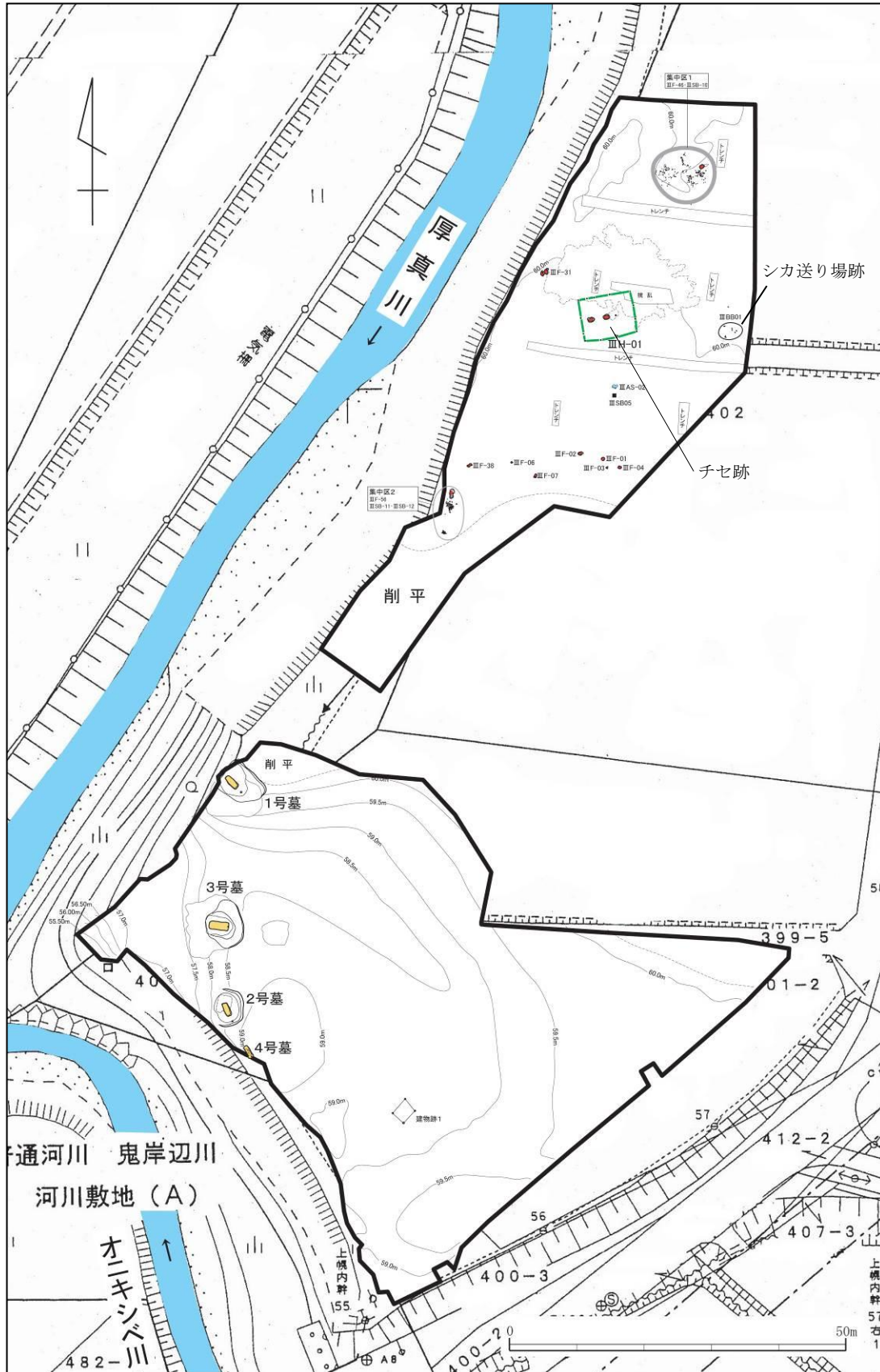
いずれの時代からも多数の金属製品が出土。技術（直接的な人）の流入も有る。

⇒ 厚真町上幌内モイ遺跡では、擦文文化期からアイヌ文化の成立期へはスムーズに移行していると思われる。アイヌ文化は突然に成立したものではなく、10世紀以降の北海道と本州東北地方やサハリン、アムール川流域からの影響で成立か

C オニキシベ2遺跡 14世紀 (平成19・20年度調査)

遺構類：平地式住居跡1軒、土坑墓4基、焼土、灰集中、礫集中、獣骨集中

遺物：各種鉄製品、漆器、ガラス玉、礫石器、骨角器類、礫、炭化種子、獣骨ほか



オニキシベ2遺跡 アイヌ文化期遺構配置図 (14世紀)

特記事項

・14世紀前葉のアイヌ墓の検出

→ **年代が確定できたアイヌ墓としては道内で最古（平成21年時点）。**

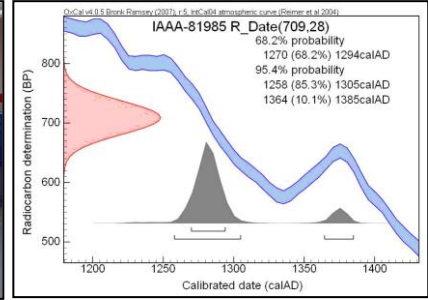
年代確定方法：1号墓出土の漆椀塗膜の文様から2つの方法でクロスチェック
 考古学的手法＝鎌倉市佐助ヶ谷遺跡と同じ文様、層位学的所見とも矛盾していない。
 理化学分析＝漆膜破片からの炭素年代測定結果



炭素の抽出作業



¹⁴C-AMS 専用測定装置



分析数値と過去の¹⁴C濃度変化

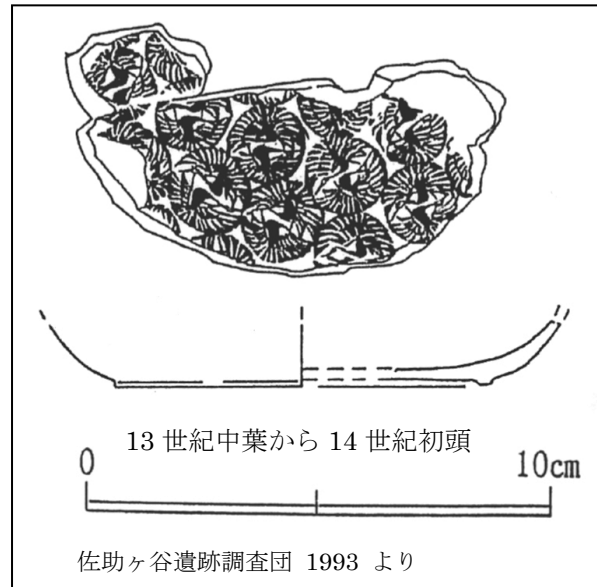
測定番号	δ ¹³ C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-81985	760 ± 30	91.00 ± 0.31	709 ± 28	1270AD - 1294AD (68.2%)	1258AD - 1305AD (85.3%) 1364AD - 1385AD (10.1%)

オニキシベ2遺跡 1号墓年代測定結果



道内における漆器で本州の出土品等と対応できたものは、初めて。

当時の漆器は高価なもの。鎌倉でも武家屋敷や寺社から出土する。



▲ 1号墓出土の漆椀のスタンプ文と鎌倉市佐助ヶ谷遺跡出土のスタンプ文の漆器

この資料は「北海道では出土するはずがない」と言われており、**鎌倉幕府と関連性が伺える資料。**

＝予想以上に広範囲、活発な中世アイヌ民族の交易活動を裏付ける極めて重要な資料

年代推定可能資料であり、オニキシベ2遺跡の土坑墓群は14世紀前半頃と推定。

・豊富な副葬品のお墓（1号墓・3号墓）と貧弱な副葬品のお墓（2号墓・4号墓）

1号墓 成人女性 木棺墓

副葬品：蝦夷太刀2、鉄斧1、刀子1、釧2、縫い針1、魚突き鉤1、漆椀1、タマサイ1（シトキ2・ガラス玉78・古銭16・絹製品1）、ニンカリ2

年代確定のお墓

タマサイ（アイヌ女性の伝統的首飾り）は**国内最古**。

シトキ（飾り板）は鍔状銅製品：類例＝伊達市、恵庭市、北見市で出土。いずれも年代は確定していないが古い時期のアイヌ文化期と思われる。絹織物や棺の板材が付着していた。直立の出土状態（厚さ1～2mm）。

ガラス玉：当時、国内ではガラス製作技術は定着していない

⇒ 外国産で、本州での出土例は極少数に限られる ＝ 北回りの可能性。

この時期の中国（元朝）付近のガラス産地は不明。

岡山市立オリエント美術館長谷一氏「**国内第一級の一括資料**」

メノウ玉：アイヌ文化ではメノウ製の玉類の製作技術はない。

9世紀～13世紀のロシア沿海地方からアムール川中流域の女真文化のお墓から同じ形態のメノウ製玉類が出土。**国内最多数の出土**。

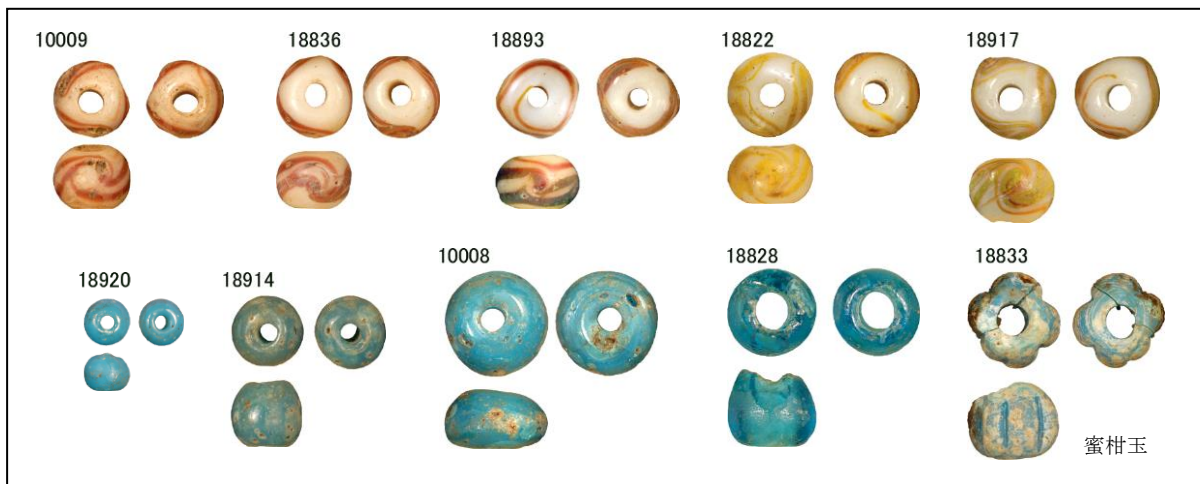
鉄製の腕輪：**全国2例目の出土例**（平成20年度時点）。

鉄製品文化の本州には出土例が無いことから、北方系金属製品か？



列島展 2017 出品

左：1号墓副葬品出土状態 上：ガラス・メノウ玉、古銭他



13世紀後葉～14世紀初頭の様々なガラス玉

3号墓 飾り

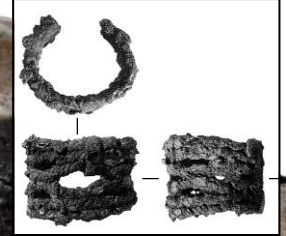
① 恵庭市ユカンボシE 4遺跡

①：恵庭市ユカンボシE 4遺跡
②：伊達市オヤコツ遺跡
③：北見市ライトコロ川口遺跡
④：根室市穂香竪穴
(標文 約800年前)

1号土坑墓出土品
左上：鐙(つば)状銅製品
右上：黒曜石
右下：耳飾り?
(コイル状装飾品?)
左：環状(かんじょう)銅製品

ガラス玉 (包含層)

左：コイル状鉄製品? 上段：ガラス玉
下段中央：環状銅製品
下段右：滴形ガラス玉



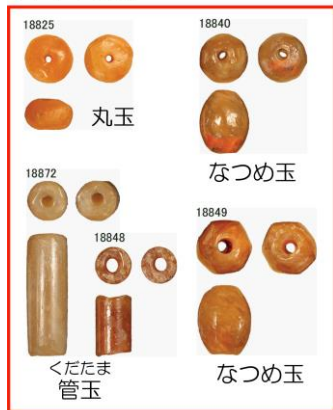
② 伊達市オヤコツ遺跡

上段：ガラス玉類と環状銅製品
下段：鐙状(つば)銅製品と板状金属製品

③ ライトコロ川口遺跡

上段左：ガラス玉 上段右：鐙状銅製品
下段：コイル状装飾品

オニキシバ 2 遺跡 1 号墓 (14 世紀) ルダンニコウヴァ墓群 (9~13 世紀)



アイヌ文化のメノウ製玉類の製作技術は知られていない。



形に特徴!

シャイガ城 (12~13 世紀)



中央はオニキシバ 2 遺跡出土のガラス玉

3号墓 成人男性 木棺墓

副葬品：日本刀1、蝦夷太刀2、小刀2（銀象嵌）、刀子3、矢筒1（銀象嵌）、ニンカリ1、内耳鉄鍋1

日本刀：通常のものより短い刀身（蝦夷拵えか？）

鉄ハバキ、鉄の鏝 = 鍛造で入念な造り。国内でも極少数例の高価なモノ。

象嵌の矢筒：**国内最古のアイヌ民具**。同じ文様のものが平取町立二風谷アイヌ民族博物館に収蔵されている。**700年前以前からの伝統文化。先住性、歴史の証。**

銀象嵌の刀子：1618年イタリア人宣教師デ・アンジェリスの日記に合致

象嵌はアイヌ民族の特徴的技術 → 優れた木製品加工技術

内耳鉄鍋：これまでの発掘調査例、民俗例では女性墓の副葬品。特異な出土例。出土状態は側置。



3号墓副葬品出土状態 手前が足元の鉄鍋



3号墓頭部側の副葬品出土状態 中央に矢筒



3号墓出土の矢筒裝飾部分



現代に伝わる矢筒 3号墓と全く同じ文様構成「九曜紋」

平取町立二風谷アイヌ文化博物館 所蔵

墓壇名	性別	副葬品	墓標穴	木棺	備考
1号墓	女性	蝦夷太刀2(鏝無)、鉄斧1、刀子1、腕輪2、縫い針1、鉤状鉄製品1、漆椀1(入組向い鶴文)、タマサイ1(シトキ2・ガラス玉78・古銭16・絹製品1)、ニンカリ2	有	有 (板材の一部が出土)	ニンカリ(耳飾)は大陸極東地域産。ガラス玉はトンボ玉16、ミカン玉1、メノウ製管玉2ほか。古銭は北宋銭主体。
2号墓	男性	蝦夷太刀2、刀子1(周溝内)	有 (周溝内)	不明	
3号墓	男性	日本刀1(鏝有)、蝦夷太刀2(鏝有)、小刀2(銀象嵌)、刀子3、矢筒1(銀象嵌)、ニンカリ1、内耳鉄鍋1	有 (墓壇内)	有	副葬品の多くは木棺の蓋の上に埋納されていたもの。鉄鍋は遺体の足元の木棺外に横置状態で出土。
4号墓	男性	蝦夷太刀1、小刀1、刀子1、古銭1、縫い針1	不明	不明	オニキシベ川の浸食により墓壇の頭部側の一部が崩壊。

オニキシベ2遺跡のアイヌ墓 副葬品一覧表

1号・号墓は副葬品が極めて多量に出土し、木棺を伴っている。しかし、2号・4号墓は少量であり、社会的立場の差と思われる。**デ・アンジェリスの「裕福な者は箱に入れ、貧しい者は囊に入れて埋葬する」の記述に合致する。**

D フチャラセナイ遺跡 13～15 世紀 (平成 20～24 年度調査)

フチャラセナイチャシ跡 13 世紀 (平成 20・22 年度調査)

遺構類：丘先式チャシ跡 1 ヲ所、平地式住居跡 4 軒、土坑墓 1 基、焼土、灰集中、礫集中、獣骨集中

遺物：各種鉄製品、鮫皮着せ腰刀、漆器、礫石器、礫、炭化種子、獣骨ほか



フチャラセナイ遺跡近景



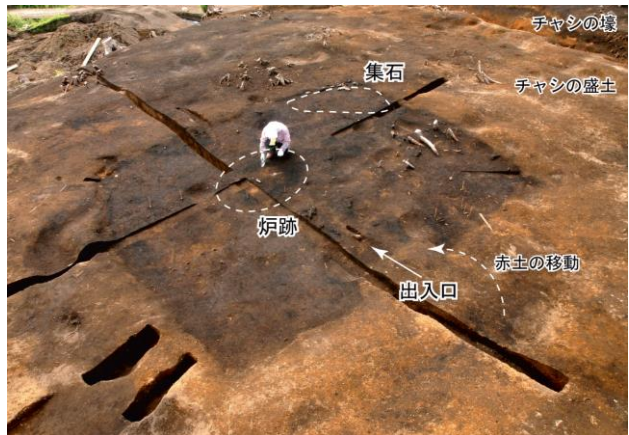
フチャラセナイチャシ跡近景 (25m×26m)



箱掘の塚。上幅 3.3m、下幅 1.3m、深さ 1.5m。



塚内の堆積状態



郭内の平地式建物跡。4 m× 6 m。(平成 20 年度)

特記事項

- ・ **チャシ跡の全面発掘調査は深川市内園 2 チャシ跡以来の 24 年ぶり**
：チャシ跡はアイヌ民族の象徴的遺跡なため、開発行為（発掘調査も含む）を避けてきた。
⇒チャシ跡の発掘調査データがほとんどなく、不明な点が多い。フチャラセナイチャシ跡は樽前火山灰によって保護されており、良好な保存状態であった。
→調査の結果、**精神文化面での使用の可能性（儀礼場としての機能）**が高いと判断。
- ・ **道内最古級のチャシ跡**：4 点の年代測定結果はいずれも 13 世紀。
平成 26 年 むかわ町穂別のニサナイチャシ跡の調査では 12～13 世紀の炭素年代測定結果が得られています。

アイヌ文化の初期年代で、構築年代が推定できたチャシ跡としては道内最古級の年代。

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-81994	920 ± 30	89.2 ± 0.3	805 ± 32	1216AD - 1263AD (68.2%)	1174AD - 1275AD (95.4%)
IAAA-81995	790 ± 30	90.6 ± 0.3	814 ± 29	1213AD - 1261AD (68.2%)	1170AD - 1269AD (95.4%)
IAAA-81996	750 ± 30	91.1 ± 0.4	784 ± 33	1225AD - 1266AD (68.2%)	1188AD - 1199AD (2.1%) 1206AD - 1282AD (93.3%)
IAAA-81997	690 ± 30	91.8 ± 0.4	759 ± 33	1227AD - 1280AD (68.2%)	1217AD - 1286AD (95.4%)

チャシ跡の年代測定結果一覧表 暦年代範囲の () 内がデータ誤差を含めた暦年代範囲の確率

・チャシ跡研究に大きな情報

チャシの発生・使用年代、構築方法、構築目的などに重要なデータが得られた。

郭内の特殊な構造物

柱穴の規模 深さ 100cm 以上 ⇔ 通常の平地式住居（チセ）跡は 60～80cm 程度。

上記柱穴に沿って土止め板もしくは立ち壁を有する ⇔ 通常のチセにはない構造。

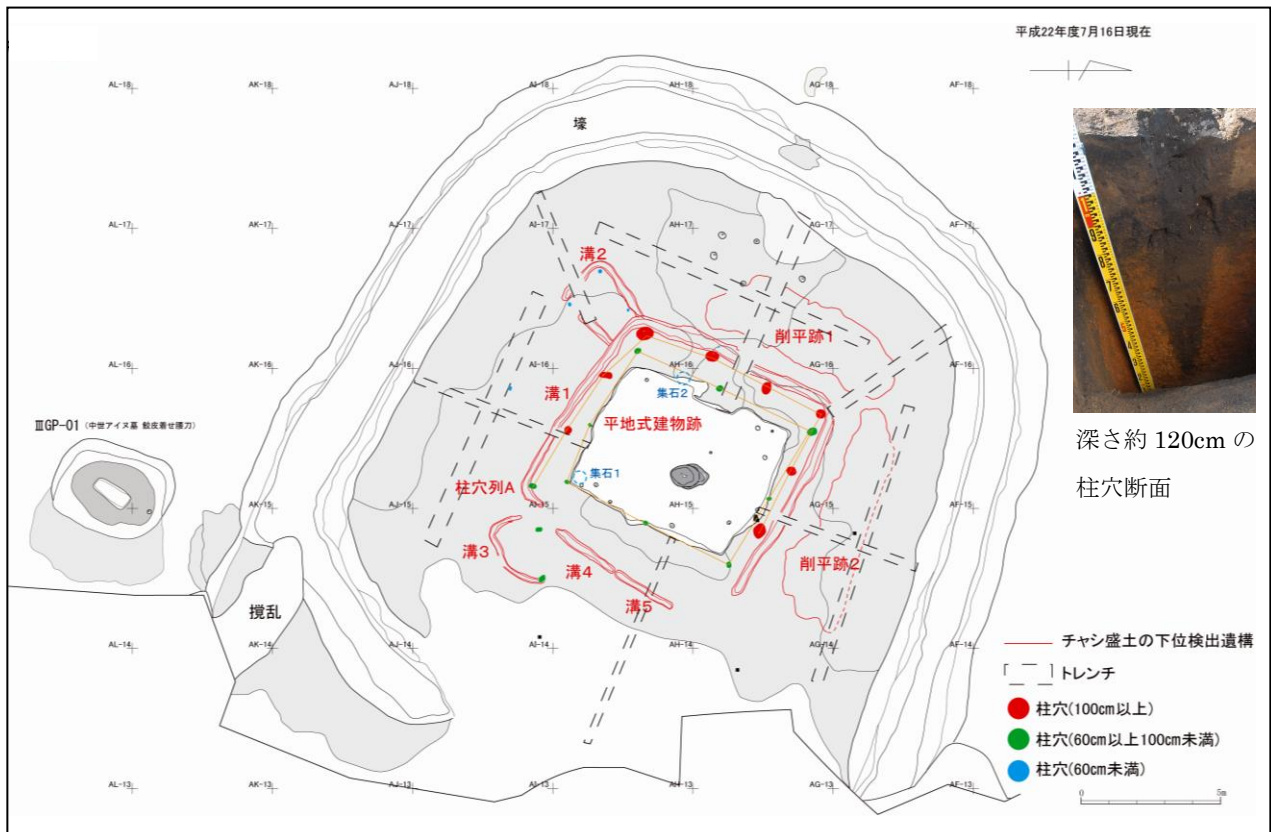
壕との構築順序は、郭内建物を構築してから壕を構築している。

⇒ 壕の平面形（隅丸方形）とも一致している → 竪穴墓の平面形との関連にも注意。

炉跡は焼骨片、炭化種子等の食糧残渣がない。

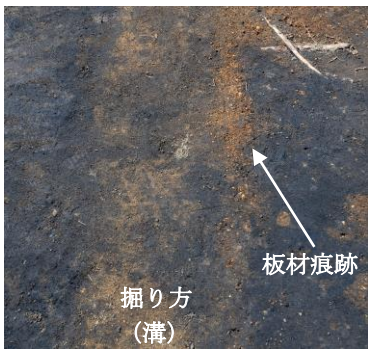
遺物はほとんど出土していない。

⇒ 上記より郭内の平地式建物跡は非日常的性格。周囲に壕を掘る必要をもつ重要な構造物。



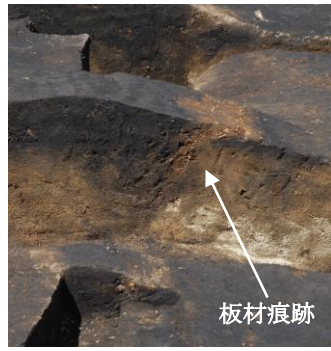
チャシの成立起源はアイヌ文化成立を考えるうえで重要

特に精神文化面において「我々」という民族ポリシーの成立に直接結びつく遺構である。

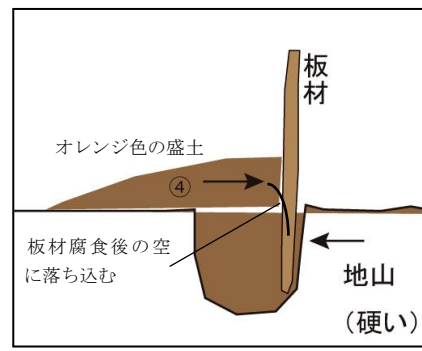


検出状態

赤い火山灰の部分が板の痕跡



堆積状態



推定構造模式図

ヲチャラセナイ遺跡

- ・国内最東端の中国産の青磁碗の1片が出土
⇒ 陶磁器を受け入れなかった木の文化の「アイヌ文化」。
- ・上幌内モイ遺跡と同じチセ（平地式住居）跡などの配置
厚真川の上流方向を意識した配置と構造。一定のルールがあるアイヌ社会の存在。
- ・現在のアイヌ民族にとっても重要な遺跡
→ (社)北海道アイヌ協会胆振地区支部連合会主催の「カムイノミ・イチャルパ」を開催。
→ 発掘調査が終了した800年前のチャシ跡で実施。
→ 研究者や一般市民も参列し、アイヌ民族の歴史や伝統儀礼に触れる機会にもなっている。



- ・1号墓副葬品の鮫皮鞘の腰刀
ほぼ完形品としては全国数例の出土例。道内では恵庭市に続いて2例目。当時としても高価な交易品。 ※ 三重県のは国指定重要文化財。



上：ヲチャラセナイ遺跡1号墓 中：恵庭市恵庭公園遺跡 下：類似資料の伝製品相模国「広次」

画像提供：日本刀販売店 イー・ソード

E 桜丘チャシ跡 15～16 世紀 (平成 21 年度調査)

立地や壕の規模、文献資料から戦闘的チャシ跡でシャクシャインの戦い (1669 年) に使用されたと推定されていたが、**調査の結果、堆積状態から 15～16 世紀のものと判明**した。

※ コシャマインの戦い (1457 年) ← 「新羅之記録」では 13 世紀頃にはこの地域にも和人が進出していた。

遺構：壕 上幅 10.1m×下幅 1.8m×深さ 3.8m (発掘調査結果)

先端部切土 最大幅 5m×高さ約 2m

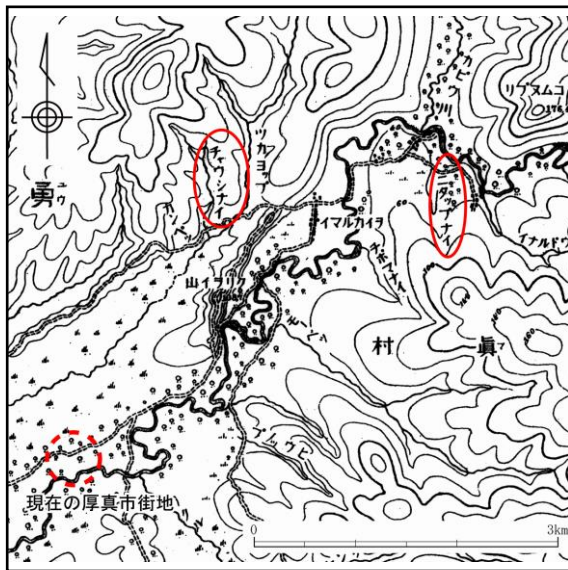
先端部溝 上幅約 1.5～1.8m×下幅約 0.1m×深さ約 0.7m

遺物：礫 (飛礫石?)、漆椀塗膜片

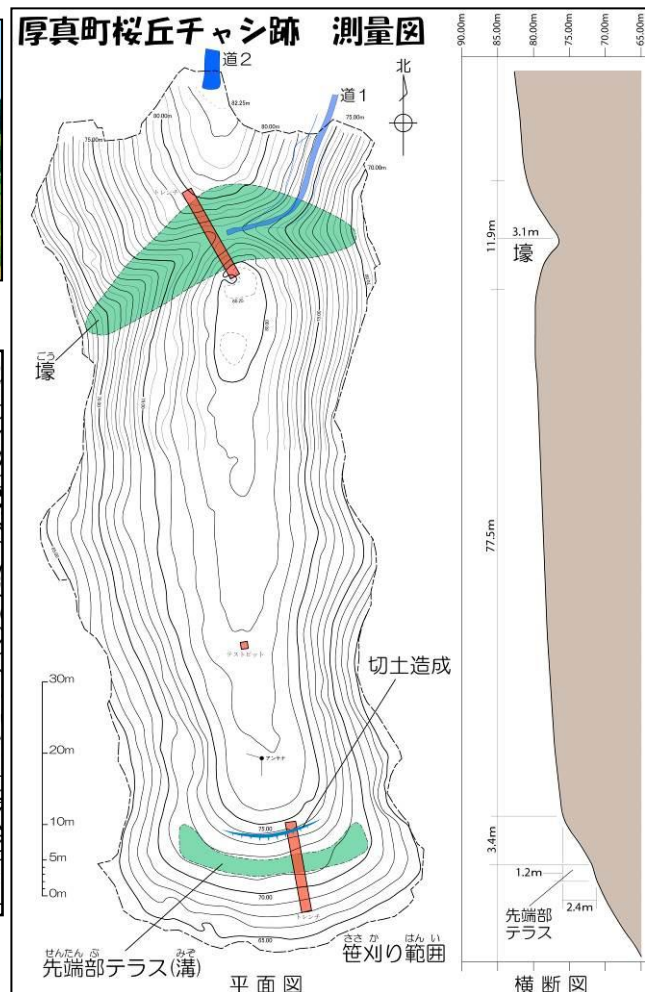
調査：緊急雇用創出事業 (学術調査) で笹刈りとチャシ跡の基礎データとなる測量と時期確定のためのトレンチ発掘調査



厚真平野の最奥部に面する丘陵先端部に立地



明治 29 年製版の地図中のチャシ地名

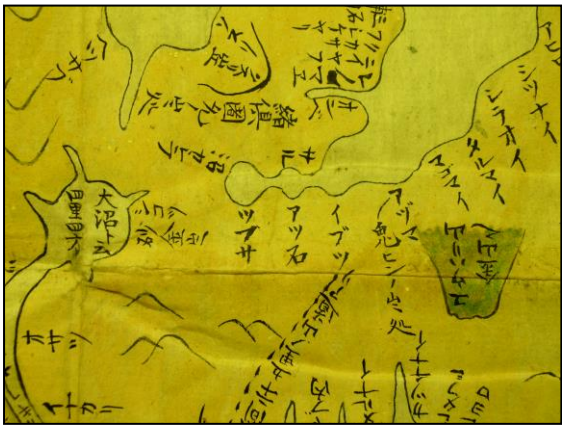


壕の側面観

3 人の位置関係より壕の規模がわかります。上幅ではヲチャラセナイチャシ跡の 3 倍。

この土木工事には当然のことながら、リーダーがいたはずであり、オニキシベ 2 遺跡の 1 号・3 号墓の厚葬墓がこの様な方々かもしれません。

タテモナシ漸ク計略シテ志夫砂理ト云處ニテ大將
 砂牟差印并ニ子二人一族ノ内二人同下僕一人討取
 ケリ
 一人乙甫爾化一人知綿破住處江登母ト云處ニテ討
 取ル是ハ今度砂牟差印ニ一和シテ下蝦夷ヲ語フ者
 トモナリ
 一人於多久具印住處阿津摩ニテ討取ル
 一人楊加留母一人加奈邊住處伊弉ト云處ニテ討取
 ル
 一人寄砂留同シ一族一人住處宇良川ニテ生捕ル
 一人宇宛津留志住處比甫久ト云處ニテ討取ル此處
 ニ於テ十六人討取内二人生捕
 一人摩加之助并ニ親屬二人住處三石ニテ討取ル
 一人仁志之助同子二人同族二人ハ佐留ト云處ニテ
 討取ル
 一人伊喜利惡志住處牟川ニテ討取ル
 一人仁志天摩留住處伊砂離ト云處ニテ討取ル
 一人宇夫吉利住處伊夫羅ト云處ニテ生捕ル
 右六ヶ村ノ頭七人同子七人親族十二人阿津摩ト云
 處ニテ十月二十三日ニ生捕ル同二十四日ニ砂牟差

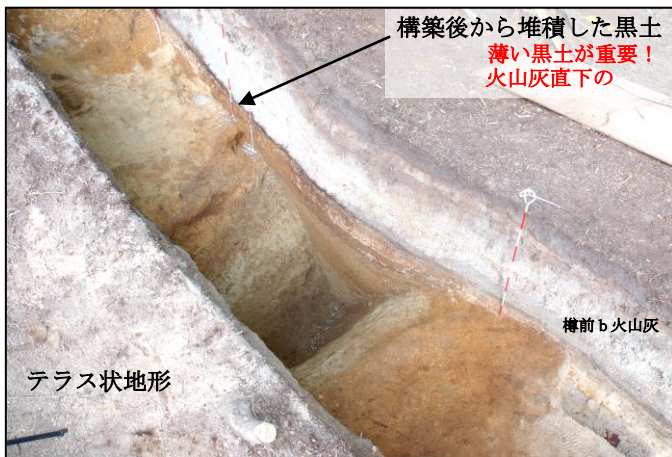


三国通覧図説「蝦夷国全図」

厚真に「オニビシ出處」との注記あり

※ オニビシ = シャクシャインと並ぶ胆振・石狩の首長

調査のきっかけとなった「蝦夷記」中の安都摩。
 (シャクシャインの戦いについて記述)



先端部溝跡の調査終了状態 (断面V字状の溝跡)



先端部切土造成、溝の掘削堆積土掘削土の上と樽前b火山灰ちび間の黒色土の堆積層厚によって推定年代15~16世紀と推定した。



壕の調査終了状態

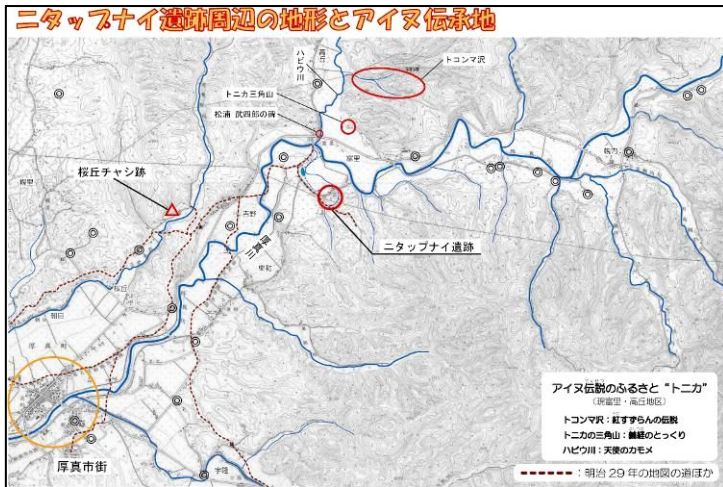
ヲチャラセナイチャシ跡と比較して立地、規模が全く異なる戦闘的チャシ跡で、**胆振日高地区のチャシ跡の中でも大規模**なもの。チャシの構築には経済力のある統率者が必要であり、この地域には守るべき權益や富の集積も確立していたと思われる。



麓から見上げた晩秋の桜丘チャシ跡
 写真右側には壕、左側先端部にはテラス状構造が見えます。

F ニタップナイ遺跡 1667年直前～1694年以前（平成19年度調査）

厚幌導水路建設に伴う発掘調査＝農業用水路建設掘削工事幅の11m×延長160mの調査区
 シャクシャインの戦いに係わる人々のコタン（集落）跡の発掘調査



ニタップナイ遺跡位置図

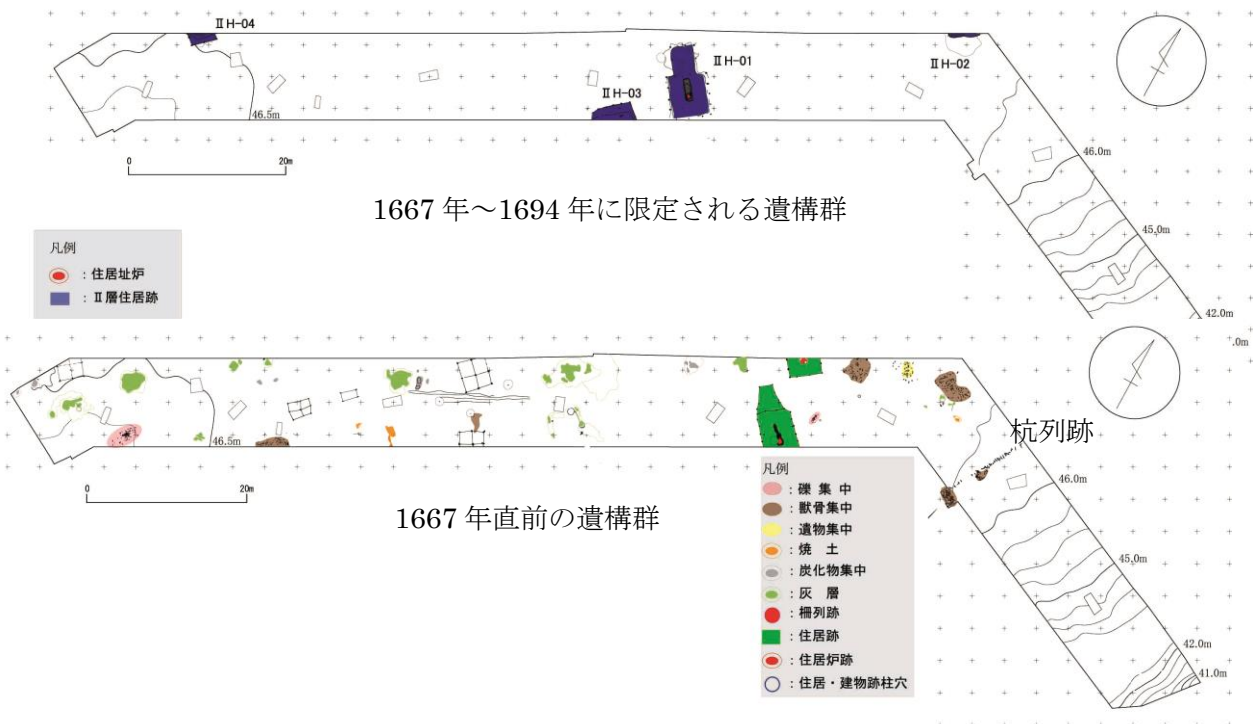
上空から見たニタップナイ遺跡



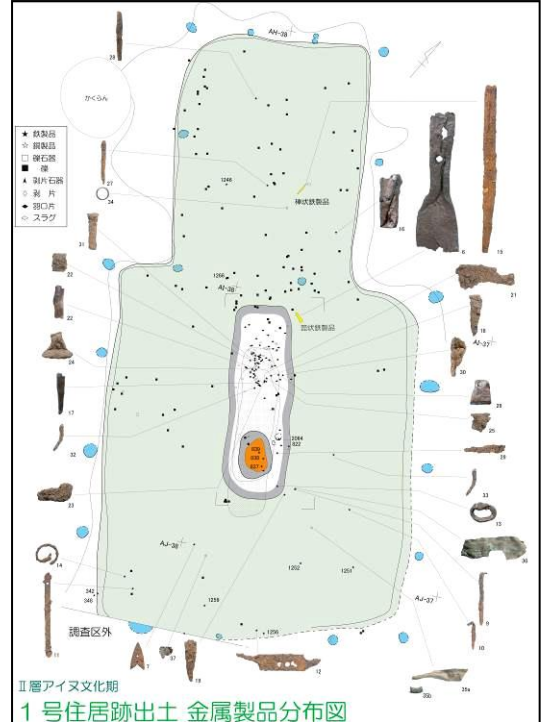
年代が特定できた火山灰の堆積状態（ⅡH-01 平地式住居跡）

遺構類：平地式住居跡6軒、杭列跡1列、焼土、灰集中、遺物集中、礫集中、獣骨集中、炭化物集中

遺物：各種金属製品、羽口、鉄滓、漆器、礫石器、骨角器、火打石、礫、炭化種子、獣骨ほか



- ・近世の降下火山灰により、層位的に形成年代が確定している。
 鍵層 樽前b火山灰 (Ta-b : 1667年) と駒ヶ岳c2火山灰 (Ko-c2 : 1694年)
 ⇒ **シヤクシャインの戦い(1669年)と同時期のコタン(集落)跡の発掘調査は道内初。**
- ・構造が判明した住居跡は、現代の復元住居(チセ)と同じ形態。



IIH-01 住居跡 (1667～1694年の間)
 周囲は樽前b火山灰。長軸918cm×短軸764cm
 ・住居跡内部から出土した多量の鍛冶関連遺物
 → 種類、数量共に豊富な金属製品と盛んな金属製品加工作業。

- ・樽前b火山灰(1667年降下)直下の住居跡



樽前b火山灰直下の住居の炉跡断面

- ・道内初、全国2例目の復元推定可能な銅製銚子。最低個体数2個体が出土。
 = 江戸時代の大名(東京都汐留遺跡大名屋敷跡)や富裕層の酒器。**再加工の痕跡と加工残片。**



ニタップナイ遺跡の銚子（厚さ1mm、内側は錫塗り）



ニタップナイ遺跡の銚子出土状態



青森県根城南部氏の銚子の使用状況（戦国末期）



この絵図の中にニタップナイ遺跡と同じ銚子が描かれています。漢字や色調に注意してください。この場所は宝物置き場を描いたものなので、「銚子」は貴重な交易品だったと思われます。

当時の本州でも、結婚式や正月などの“晴れの場”で酒器として使われていました。（蝦夷島奇観）

・物送り場（イワクテ）跡の検出

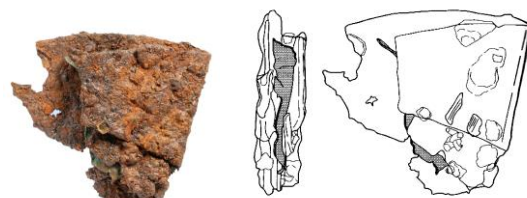
＝鉄鍋片、銚子片、縫い針、火打石、漆器碗塗膜片、中柄、カワシンジュガイ殻皮がまとまって出土。他の集中出土遺物は礫や炭化物、獣骨などほぼ単一種類で構成されている。



物送り場跡 右下に漆碗塗膜（1667年）



銚子の口縁部残片 再加工で切断されている。



■：銅板

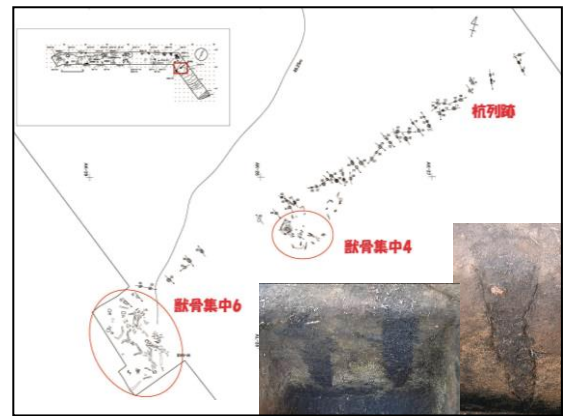
銅板を挟み込んでいる板状鉄製品

・謎の杭列跡

＝ **道内初発見**。打ち込み杭でコタンの内側と外側の境界付近。ヌササン（イナウで構成される祭壇）の跡と思われる。



杭列跡の検出状態



杭列跡配置図と獣骨集中 (左下がシカの頭骨集中)

・ 25 頭分のシカの頭蓋骨集中 (獣骨集中 6)

- = **全国初発見**。2m×3mの範囲よりまとまって出土。雄雌各4段に重なったシカの頭骨
- ⇒ 1667年の樽前火山灰にパック。シカ送り場跡の説と安置場所の説。いずれにしても、シカ送り儀礼の存在を肯定。遺跡内にほぼ全面にシカの四肢骨が出土しており、頭骨との個体数比率が合わないことから、他にも同様な地点が存在している可能性が高い。
- ⇒ 盛んなシカ猟の存在 → 食料自給以上のハンティングの可能性。
- シカは1頭以外が2・3歳のもの=成獣の大きな毛皮と質の良い毛並み。
- 交易品としての毛皮産物。アイヌ社会の変容。積極的な交易体制。

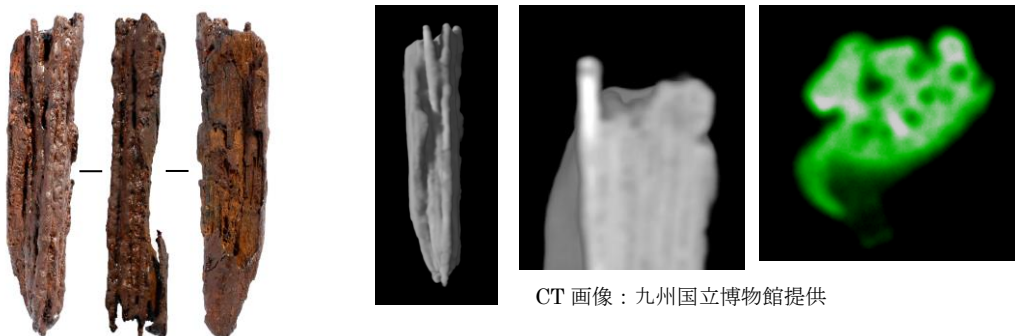


獣骨集中 6



4段に積み重なったオスの頭骨 1667年の火山灰にパックされた状態。当時の行為をそのまま残す貴重な資料。

- ・ 木製容器に入った縫い針の束 = 最新技術での分析で15・16本の束と判明
- 3DCTスキャン画像の解析によって、**全国でもほとんど類例が無い多量の本数**。



CT画像：九州国立博物館提供

- ・ 木製容器に入った縫い針の束 (左：展開写真) と CT スキャン、断面画像

⇒ 近世アイヌ文化期の指標となる数少ない遺物「煙管（キセル）」



・その他の金属製品（和人との交易品もしくは再加工品）



・北方系裸性短粒形オオムギの出土

検出点数は少量であるが、この地域には継続的に栽培されていることが判明。

⇒ より北方域の要素が残っていた地域

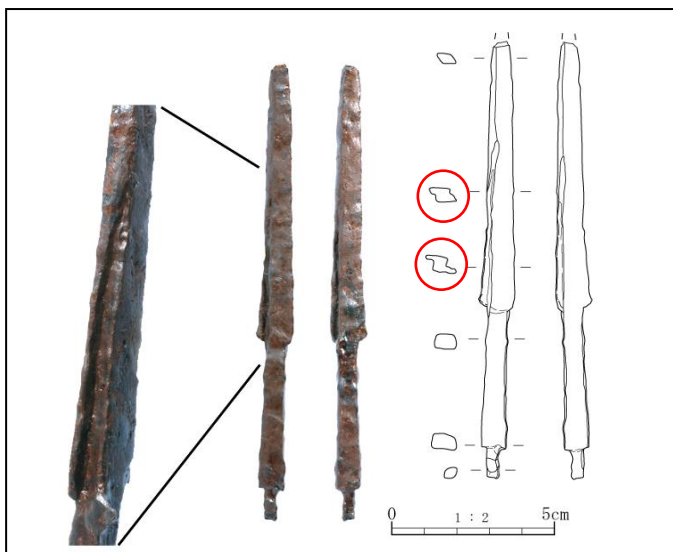
※ ニタップナイ遺跡の擦文文化期（約 900 年前）

平地式住居跡の検出 = 上幌内モイ遺跡の古いアイヌ文化期の住居跡と同じ構造

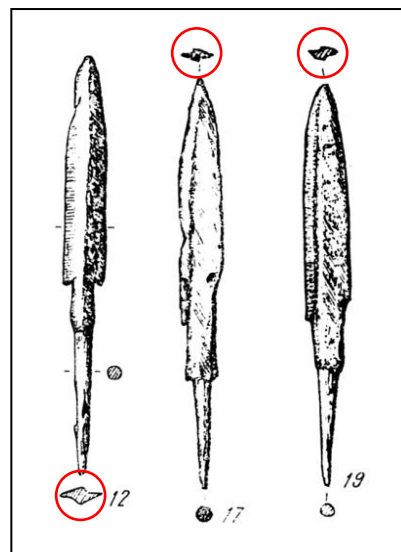
大陸系遺物の出土

= ガラス玉と女真文化の鉄鍬 ⇒ 擦文文化期からの交易ルートか

= アムール女真文化の鉄鍬。鍬身部に特徴的な形態。国内初出土。



ニタップナイ遺跡の鉄鍬（溝状、断面形に注意）

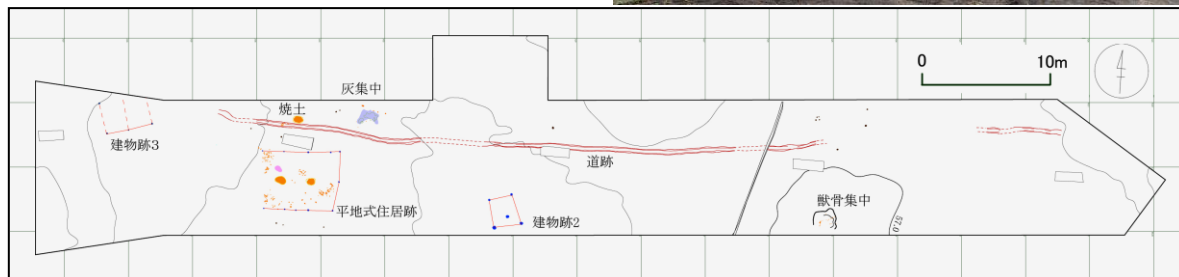


アムール川中流域の遺跡出土。

G 幌内7遺跡 14世紀（平成20年度調査）

遺構類：平地式住居跡1軒、道跡1条、
灰集中、礫集中、獣骨集中、
炭化物集中

遺物：各種金属製品、礫石器、火打石、
礫、炭化種子、獣骨ほか



アイヌ文化期の遺構配置図

特記事項

- ・明瞭な道跡の発見

16世紀～17世紀前葉にかけての人の道跡 → 幌内経由で鶴川流域への山越えの道か？

- ・平地式住居跡と灰送り場跡のセット関係（14世紀）

上幌内モイ遺跡・オニキシベ2遺跡・ラチャラセナイ遺跡と共通のパターン



中世アイヌ文化期の住居跡

上幌内モイ遺跡と同様に炉跡が2カ所
並ぶ。北東側に灰送り場跡を検出。



約350年前の人々が歩いて、踏み固まり、
窪んでいます。

道跡

上の住居跡より新しい年代の道。

H オニキシベ4遺跡 12世紀（平成24年度調査）

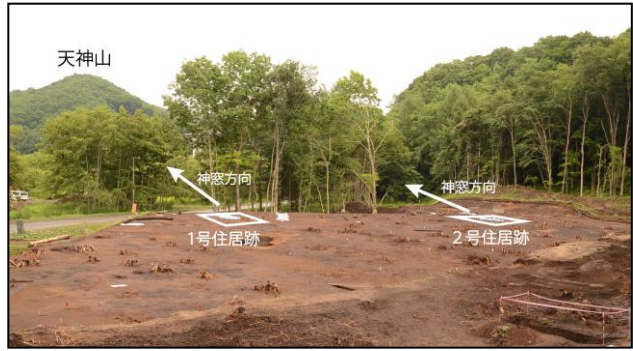
擦文終末期の集落の発掘調査

遺構類

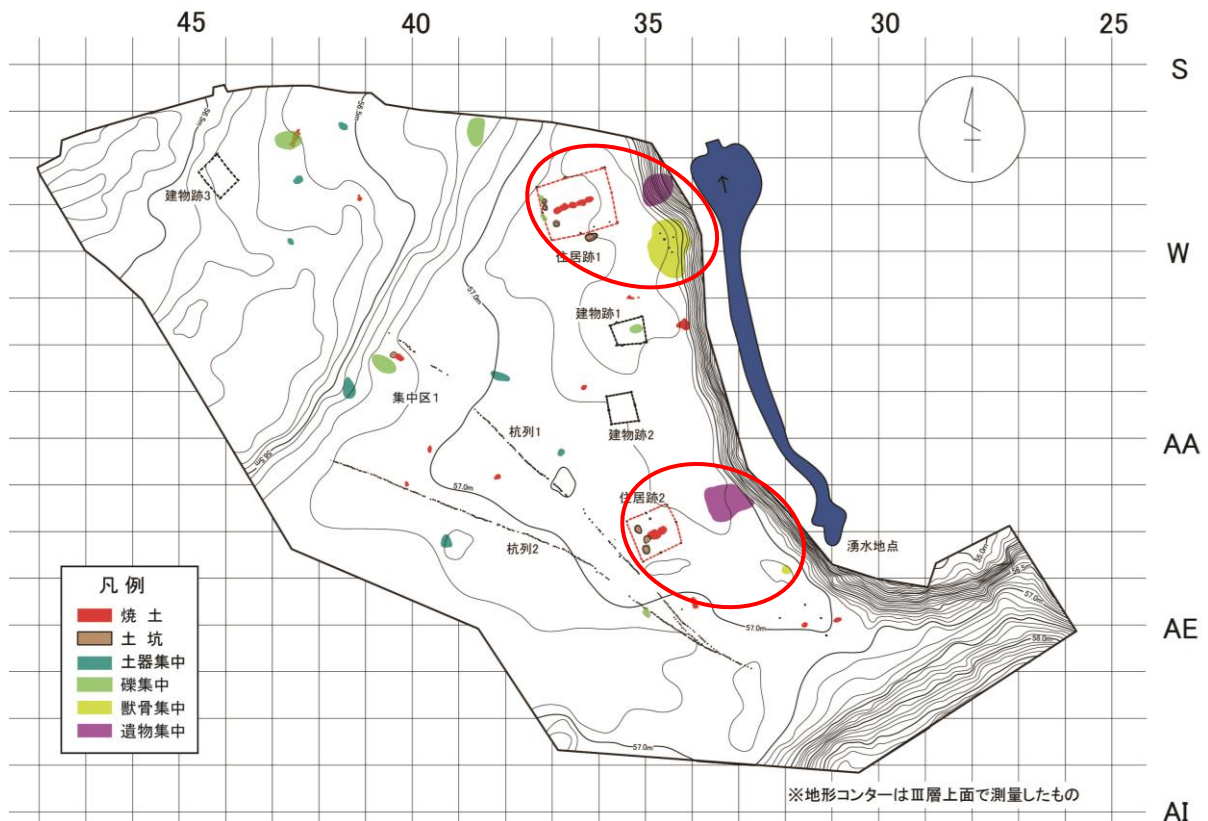
: 住居跡2軒、建物跡3軒、屋外炉13カ所、
遺物集中2カ所、土器集中8カ所、礫集中
3カ所、獣骨集中2カ所杭列跡2条（アイヌ文
化期の可能性有り）

遺物

: 擦文土器（後期）、たたき石、台石、環状
錫製品、刀子、火打石、礫等



オニキシベ4遺跡の住居



オニキシベ4遺跡 擦文・アイヌ文化期遺構配置図

集落の立地・景観は、典型的なアイヌ文化の様相

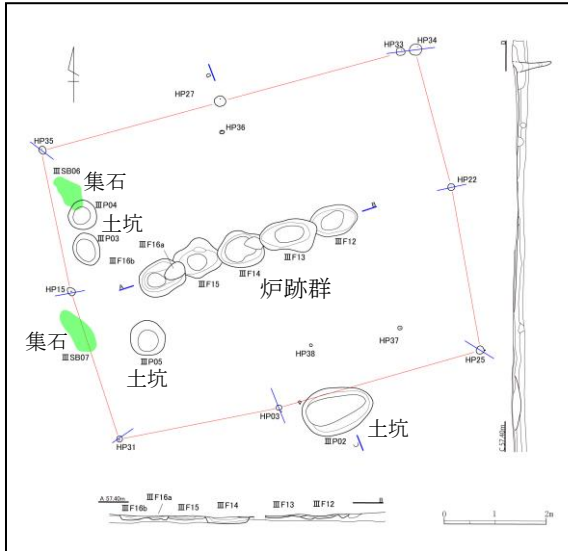
- ・住居跡と送り場跡・獣骨集中の位置関係⇒遺構配置から見える精神文化面
= アイヌ文化と同じ様相・景観（神窓と送り場）
⇒ ミッシング・リンク（失われた・輪）の解明

※ミッシング・リンク

縄文時代以降続いた土器文化の終焉と次の鉄鍋の時代であるアイヌ文化への移行期について解明されておらず、断絶があるものと思われる。

これを、歴史を「繋がった鎖」として例え、北海道の歴史の空白、断絶期である13・14世紀を「失われた輪」と表現するほどの謎の時代。厚真町では、この時期の遺跡が多く、胆振東部・日高西部・石狩南部地域の時代変容（アイヌ文化の成立）プロセスを解明できるものと期待されている。

住居跡 ～竪穴式から平地式～



項目	擦文文化期	アイヌ文化期	共通性
時期	11・12世紀	13～15世紀	—
住居形態	竪穴・(平地式)	平地式	△
平面形	正方形に近い長方形	長方形	△
出入口	偏在	長軸中央	×
前小屋	無し	一部確認	△
炉跡	楕円形1～2カ所	楕円形2カ所	△
炉跡灰層	無し	有り	×
柱穴	打込み柱・外踏ん張り	打込み柱・外踏ん張り	○
床面	整地造成	造成無し	×
土坑	有り	無し	×
集石	棒状礫・入口側	棒状礫・入口側	○
神窓方向	上流・山	上流・山・東	△
屋外 獣骨集中等	神窓側	神窓側	○

上：オニキシベ4遺跡1号住居跡

擦文ーアイヌ文化期の住居跡属性比較表

住居形態等の属性比較からは、擦文文化期とアイヌ文化期とで差異があるものの共通要素もある。特に床面造成や土坑構築などは「土を掘る」というこれまで続いた行動が大きく異なる特徴と言えよう。ただし、床面造成も浅く、柱穴属性、神窓概念の確立などから擦文文化期からアイヌ文化期への移行過程は、大きな変革が無く進んだものと思われる。

採取場所	試料 形態	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
遺構：Ⅲ層1号住居跡内 焼土13 層位：上部黒色土	炭化種子 (ブドウ科)	1171calAD - 1216calAD (68.2%)	1058calAD - 1071calAD (1.3%) 1155calAD - 1257calAD (94.1%)
		遺構：Ⅲ層1号住居跡内 焼土16 層位：ⅢBL	炭化種子 (ブドウ科)
遺構：Ⅲ層2号住居跡内 焼土18 層位：ⅢBL	炭化クルミ片	1058calAD - 1073calAD (11.0%)	1045calAD - 1095calAD (25.0%)
		1155calAD - 1210calAD (57.2%)	1119calAD - 1142calAD (8.0%) 1147calAD - 1219calAD (62.4%)
遺構：Ⅲ層2号住居跡内 焼土19 層位：ⅢBL	炭化種子 (コナラ属)	1170calAD - 1215calAD (68.2%)	1057calAD - 1075calAD (2.9%) 1154calAD - 1255calAD (92.5%)

上：オニキシベ4遺跡年代測定結果 (12世紀後半～13世紀初頭)

右：オニキシベ4遺跡出土の擦文後期の土器 (12世紀代)



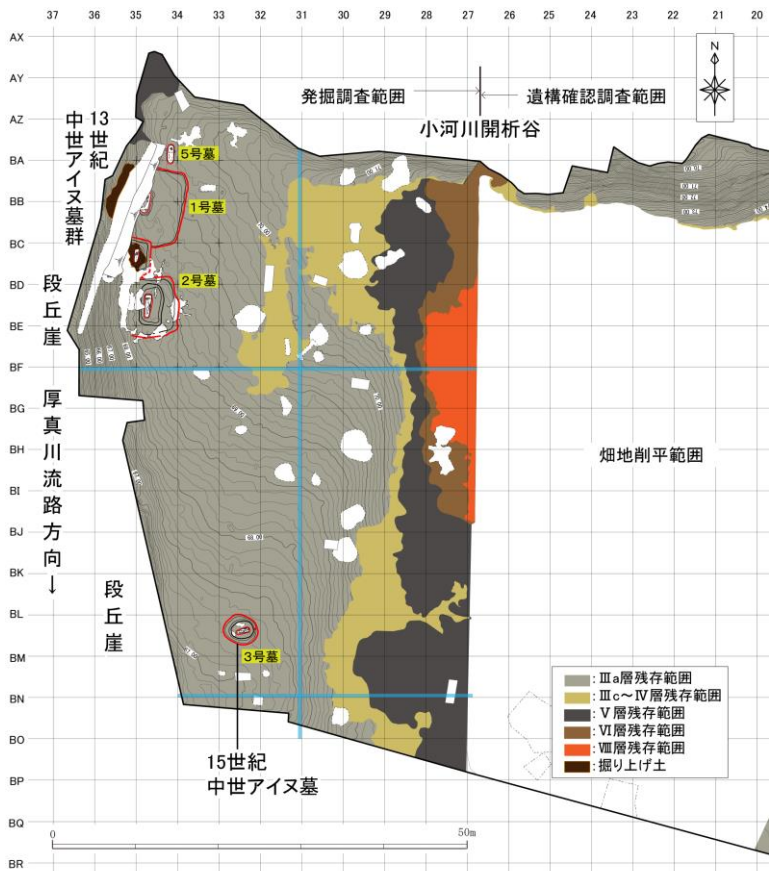
移行期にあたる「ミッシングリンク」の住居跡の発見は極めて重要な資料。

⇒ アイヌ文化は突如発生するのではなく、擦文文化期からの連綿とした繋がりがあがる。

I 上幌内2遺跡 12世紀（平成26年度調査）

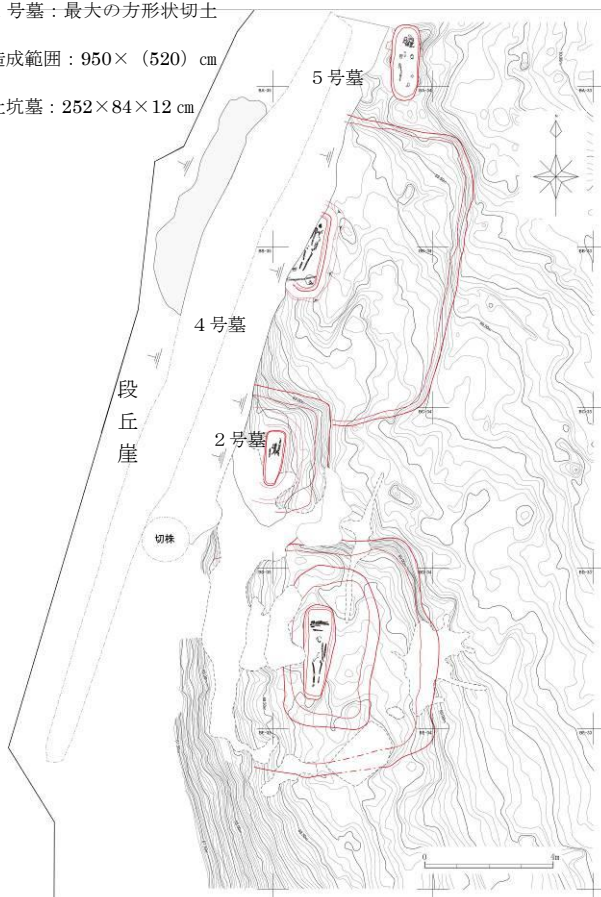
～アイヌ墓から見える13世紀 アイヌ文化の初源と変遷～

5基のアイヌ墓の形態と立地の差異



アイヌ文化期遺構配置図（左）と段丘縁辺部の1号・2号墓（右上）、平坦面の3号墓

1号墓：最大の方形状切土
 造成範囲：950×(520) cm
 土坑墓：252×84×12 cm



1・2・4・5号墓 13世紀

いずれも段丘縁辺の肩部分に立地し、造成面は方形状。頭位方向は北側（厚真川上流方向）を示し、墓標穴は構築されていない。
 ⇒立地・方形切土造成はオニキシベ2遺跡の14世紀代と共通。
 ⇒頭位は上幌内モイ・フチャラセナイ遺跡の擦文墓と共通
 =擦文的要素。
 ⇒墓標穴慣習の成立以前=より古い擦文的要素。
 これら4基は密集しており、近い時期に構築された土坑墓群と思われる。



3号墓 16世紀

段丘上のほぼ平坦面に構築
 =上幌内モイ遺跡1号・2号墓と同じ立地
 ⇒墓標穴が構築されている。
 =現代の民俗例へと通じる新しい要素。

両タイプは層位的にも3号墓が1号墓などよりも新しいことを確認している。

1号墓（男性） 造成範囲：950×（520）cm 土坑墓：252×84×12 cm



日本刀1 蝦夷太刀2 刀子2 漆碗塗膜1
漆丸盆塗膜1 骨鏃・中柄など

日本刀はオニキシベ2遺跡2号墓に続いて町内2例目。この時期の日本刀出土例は国内でも極少数であり、現存の伝世品も少ない。



極めて浅い土坑墓 = 木棺墓

- ⇒ 切土造成排土を木棺の上に被覆すること（封土）で、土坑墓埋葬と同じく不可視状態となる。
- 立地が段丘縁辺部であることから封土のほとんどが斜面下方へ流出している。
- ⇒ 日本刀と頭蓋骨との間に覆土（封土）が堆積していることから、木棺の蓋の上に配されていた可能性がある。
- ⇒ 下顎骨の移動＝木棺内の空隙環境の移動。
- ⇒ 堆積状態で頭部側の黒色土の落ち込みが急激に落ち込む。

2号墓（男性） 造成範囲：732×（484）cm 土坑墓：294×100×38 cm



象嵌用の金属円盤
下中央には絹片が付着。



蝦夷太刀2 腰刀2 刀子2 ヤリガンナ?1 鉤状鉄製品1 象嵌裝飾銅製品10 漆塗膜1 絹製品 骨鏃・中柄など。

絹製品は顕微鏡観察の結果、文様の入った錦であることが判明している。絹製品はオニキシベ2遺跡1号墓でも出土している。

4号墓（9歳前後） 方形状切土造成範囲（420）×（230）cm 土坑墓：173×59×38 cm



蝦夷太刀1 小刀2 刀子1 目貫等銅製刀装具3 骨鏃・中柄など

5号墓（女性 20歳前後） 切土造成範囲不明 土坑墓：234×87×37 cm

北海道内最古の和鏡（12世紀中葉・京都産）と北方系、北海道系遺物を伴うアイヌ墓





秋草双鳥文鏡 (あきくさそうちょうもんきょう)



ヒグマの獣毛・獣皮 (和鏡の下、頸元から出土)



頸周り副葬品出土状態

: コイル状装飾品・ガラス玉・古銭・管状銅製品出土状態



5号墓の頭部及び頸周りの副葬品 (保存処理後)

コイル状装飾品は道内最多数。大陸・サハリン由来の金属製品。古銭は熙寧元寶 (初鑄 1068年)



黒曜石転礫出土状態



黒曜石転礫

上幌内モイ遺跡において、擦文文化期中期後半 (11世紀) の儀礼場跡 (集中区 1・2) や3号墓 (12世紀前半) から同様な黒曜石転礫が出土している。14世紀前半のオニキシベ2遺跡4号アイヌ墓からも出土しており、擦文文化期から中世アイヌ文化期前半に至るまで儀礼的な遺物と思われる。札幌市や恵庭市のアイヌ墓からの出土例もある。

アイヌ文化の葬送儀礼における墓標の出現

アイヌ民族の葬送儀礼では、墓標を立てることが知られている。これまでの発掘調査においても頭部側の延長線上に墓標の痕跡 (穴) を確認されていた。上幌内2遺跡の13世紀のアイヌ墓では4基の全てにおいて墓標穴が存在していないことから、14世紀に成立した可能性が高い。本州の墓標である木製卒塔婆 (板状) は12・13世紀に成立していることから、この影響を受けている可能性もある。



鉄製ワイヤー状腕輪



腕輪に残る繊維製品の痕跡（絹製品よりも荒い繊維）

計4点が両手首付近に装着された状態で出土し、一部に繊維製品の痕跡ある。衣服の一部？同一製品がオニキシベ2遺跡1号墓より2点が出土している。本州に出土例が無く、腕輪装着の習慣も無い事から、コイル状装飾品同様に大陸系製品と思われる。

3号墓（男性） 円形状造成範囲 398×385 cm 土坑墓：171×65×37 cm



検出状態（中央が墓坑）



完掘状態（写真上部が墓標穴）



完掘状態 蝦夷太刀1 刀子1 漆碗塗膜1など



墓標穴断面

厚真町内における擦文から中近世アイヌ墓一覧表

遺跡名	推定時期	遺構名	立地	造成面 形態	墓坑平面形	頭位 方向	墓標	木棺	副葬品
上幌内モイ遺跡	12世紀前半	3号墓	段丘縁辺部	造成無し	不整長方形	北北東	無し	有り ?	擦文土器3、黒曜石転礫1、刀子1、鎌1、環状鉄製品1
ワチャラセナイ遺跡	12～13世紀	2号墓	段丘縁辺部	不明	長楕円形	北	無し	無し	刀子1、錫製Ω形耳飾1
上幌内2遺跡	13世紀	1・2・4 ・5号墓	段丘 縁辺肩部	方形	隅丸長方形 ～隅丸長台形	北	無し	一部 有	和鏡1、日本刀1、蝦夷太刀(挿入り)多数、コイル状装飾品・ガラス玉多数、北宋銭1、鉄製腕輪4、縫い針、漆椀・漆盆1、黒曜石転礫4、銅製品、毛皮、中柄・骨簾多数ほか
オニキシベツ遺跡	14世紀	1～4号墓	段丘 縁辺肩部	方形	隅丸長方形 ～長方形	東～ 南南東	有り	一部 有	鐸状銅製品(12c後葉和鏡再加工品)1、北宋銭主体(最新・景定元寶1260年初鑄)・ガラス玉多数、鉄製腕輪2、スタンプ文漆器1、銅製品、錫製Ω形耳飾2、日本刀1、蝦夷太刀(挿入り)多数、銀装飾矢筒1・刀子2、鉄斧1、黒曜石転礫1、縫い針、内耳鉄鍋1ほか
ワチャラセナイ遺跡	14～15世紀	1号墓	段丘 縁辺肩部		隅丸長台形	南東	有り	不明	漆塗敏革着腰刀1、漆椀1ほか
上幌内2遺跡	16世紀	3号墓	平坦面	楕円形	隅丸長台形	東	有り	無し	蝦夷太刀1、刀子1、漆椀1、骨簾多数
上幌内モイ遺跡	16世紀後半	1・2・4号墓	平坦面	円～ 楕円形	長台形	北東 ～東	有り	不明	蝦夷太刀1、鉄鍋1、漆椀2、骨簾多数、刀子3ほか
上幌内3遺跡	17世紀初頭	1号墓	平坦面	楕円形	長台形	北東	有り	無し	吊耳鉄鍋1、鉈3、鉄斧(鉈形)、鎌、刀子、銀製耳飾(円形)2、ガラス玉多数ほか

※アイヌ民族の葬送形態における墓標 ⇒ 13世紀台までは存在せず、14世紀に出現する。

※副葬品のうち14世紀の蝦夷太刀には樋(刀身の溝)が入る比率が高い ⇒ 伊達市オヤコツ遺跡も同じ傾向。

調査研究と慰霊

平成26年度、上幌内2遺跡では合計5ヵ所、5体の遺体を発掘調査、記録し取り上げた。現代に伝わるアイヌ文化、アイヌ民族の先祖にあたる方々のお墓である。

そこには、直接的な血縁関係を持たずとも、先住民族としてこの地で暮らしてきた方々への敬意と慰霊の思いを寄せる方々、現代社会のアイヌ民族の方々の繋がりを尊重し、伝統儀礼にのっとったカムイノミ(神々に感謝を捧げる儀式)、イチャルパ(先祖供養)を調査取り上げ時に執り行って頂いていることを末筆ながら紹介させていただきます。

このことは、私たち調査研究する立場の者、700～800年以上前より受け継いできた伝統文化をこれからも継承し、多くの方々に先住民族アイヌの誇りを伝えてくれる機会となりました。

発掘調査、記録だけではなく、いろいろな意味を含み、過去から未来への大切なものを伝えてくれる大変貴重な文化財でもあります。

調査時点、調査後も含めて、私たちが先人たちの歴史をどの様に次世代のより良い未来へつなげていくかも試されているのかもしれません。



平成26年 上幌内2遺跡発掘調査現場カムイノミ

J 宇隆1遺跡（昭和34年工事中発見）

～12世紀 奥州藤原氏との蝦夷ヶ島～

昭和34年2月2日 宇隆公民館建設中に発見。

昭和47年12月 厚真町郷土研究会作成の町内遺跡一覧表に「17 宇隆 公民館敷地内 前北式、擦文式、刻文式、須恵器」と記載。

平成20年1月 東海大学 准教授 松本建速氏
中世陶器の可能性が高いことを指摘。また口縁部打ち欠き、遺跡の立地から奥州藤原氏の経塚関連の資料を示唆。



上空からの宇隆1遺跡（写真左が厚真町市街地）

平成21年12月8日付け 岩手県平泉町役場 八重樫忠郎氏より画像データからの所見を頂く。

時期：12～13世紀 用途：経塚外容器か蔵骨器 産地：越前または常滑

平成22年8月29～30日 岩手県平泉町役場 八重樫忠郎氏 来町

常滑産中世陶器 中野編年第2期前後と指摘

※ オニキシベ2遺跡1号墓 副葬品にスタンプ文漆器の重要性を指摘

平成23年2月12日 愛知県常滑市民俗資料館 中野晴久氏

常滑産第1b期（1131-1150年）または2期（1151-1174年）と鑑定（実物を常滑へ郵送）

奥州藤原氏の全盛の時代 = 基衡・秀衡の時代

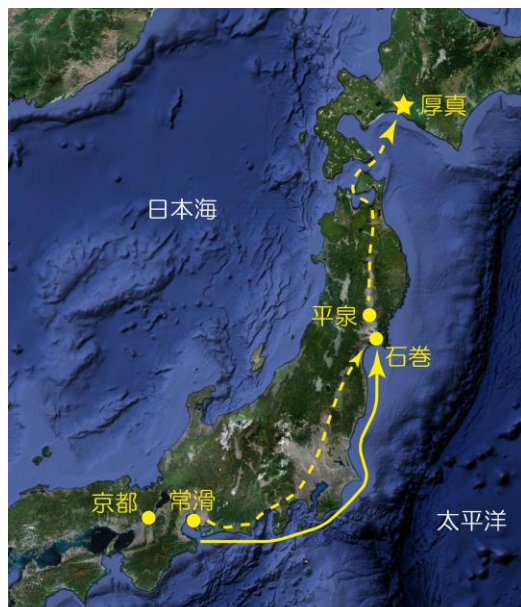


厚真町宇隆1遺跡の常滑産中世陶器の壺

年代	山茶碗	小碗・小皿	片口鉢Ⅰ類	壺	広口壺・片口鉢Ⅱ類
1a 1130					
1b 1150					
2 1175					
3 1190					
4 1220					
5 1250					
6a 1275					

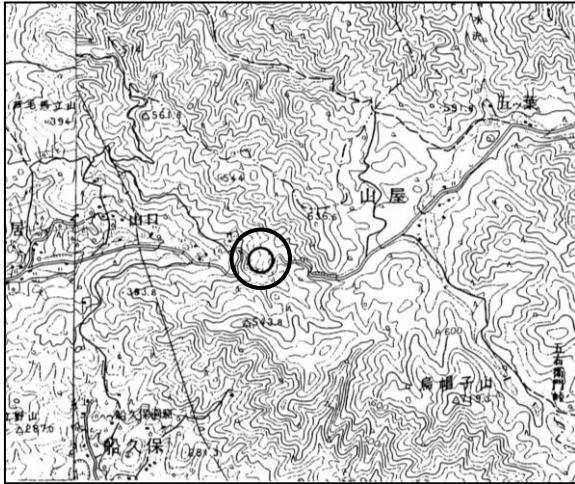
上：常滑産中世陶器の編年表

左：常滑から厚真への想定ルート

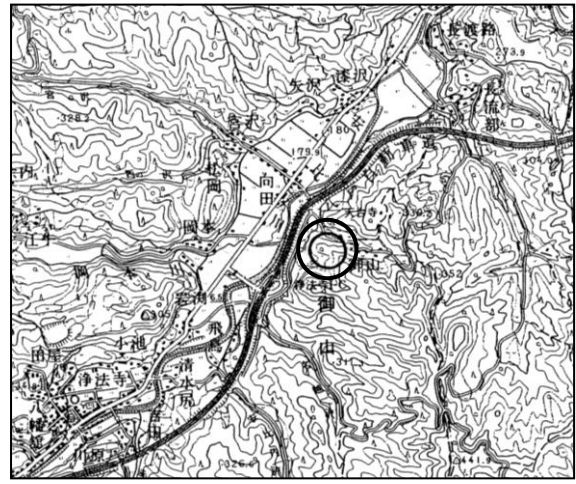


平泉町の隣町奥州市前沢区は厚真町の姉妹都市で12世紀の川湊（かわみなと）の白鳥館がある。

東北地方の経塚の立地



岩手県紫波郡紫波町山屋館経塚

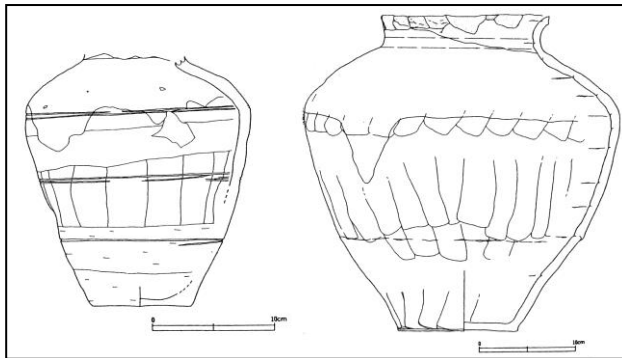


岩手県浄法寺町土踏まずの丘経塚

⇒ 峠や街道を見下ろす丘陵の先端部付近に経塚が造られる傾向がある。

＝ 厚真町宇隆1遺跡も鶴川・沙流川流域へのルートを見下ろす丘陵先端部

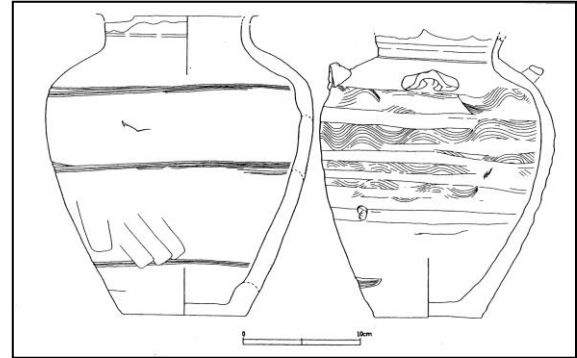
東北の経塚埋納壺の特徴



岩手県花巻市高松山経塚群

⇒ 口縁部を意図的に打ち欠く特徴

＝ 宇隆1遺跡の壺も口縁部を大きく打ち欠く



岩手県紫波郡紫波町山屋館経塚

この壺が意味するところ

- ・ アイヌ文化期の成立直前期にあたり「ミッシング・リンク」にあたる資料
＝ 石狩低地帯南部、日高地域におけるアイヌ文化成立（擦文文化終焉）を検討するうえで重要な資料。
- ・ これまで「北海道で出土するはずがない」とされていた資料
＝ 太平洋交易ルートの存在を示す資料。日本海交易ルートの陶磁器を多出するアイヌ文化の遺跡とは異なる文化圏の存在。
- ・ 経塚外容器とするならば北海道に初めて仏教が伝来年代を約 200 年遡る資料
※ これまでは貞治 6 年（1367 年）に建立された函館市「貞治の板碑」（北海道指定有形文化財）が明確な仏教系遺物の最古であり、本州と接する道南部に仏教が伝わったものと考えられていた。＝ 世界文化遺産「平泉」の仏教政策と政権を支えた北方交易の証となる資料
※ しかし、発掘調査資料ではないため経塚外容器であったかは確実な証拠となっていない。

厚真の発掘成果から見え始めた新たなアイヌ文化の歴史

【北海道の先住民族としての古くからの伝統文化】

アイヌ民族の文化は、物質文化において約 700 年前まで遡ることができる。

家屋（チセ・平地式住居）の構造についても約 700 年前にはほぼ現在のものと同じ。

⇒ 和人が記録した文献で確認できる約 400 年前以降のアイヌ文化の歴史をさらに遡る年代。

北海道の先住民族アイヌ民族の 700 年前からの伝統文化の歴史はそのまま、北海道の土地、自然に根付き育まれた北海道の中世の歴史として認識するべき成果です。

【アイヌ文化の成立期】

考古学の物質文化からは擦文土器の終焉をもって「アイヌ文化期」の始まりとする消極的判断。しかし、生産・交易活動の活発化や儀礼、「大切な方角」という精神文化を考えると擦文文化期後期（約 1,000 年前）まで遡ことができそうです。近年、瀬川拓郎氏は「擦文—アイヌ文化」などの用語を使用することもあり、当時の社会の動きを見据えるべき時期に来ています。

これまで、ミッシング・リング「失われた鎖」とされてきました。この時期については遺跡の堆積層序の詳細観察や炭素 14 年代測定法の援用など新たな調査・研究方法が取り込まれ、これらのデータを再構築することによって解明、狭まりつつあります。

【持つ者、持たない者の社会】

アイヌ民族ですべてが平等というものではなく、オニキシベ 2 遺跡の土坑墓群の副葬品の多寡や木棺の有無にみられる「持つ者、持たない者」という社会構造があったようです。そして持つ者は、村長や地域集団の首長層であったと思われる、この集団を支える空間的範囲がイオル（アイヌの伝統的生活領域）と言えそうです。このイオルを守るべき闘争もあったものと思われる、桜丘チャシ跡は、まさにその目的で構築されたものと思われる。

【伝統文化の変容】

約 700 年前から続く確実なアイヌ文化は、長い歴史の中で変容している。例えば、平地式住居跡の神窓方向は擦文文化期後期から中世後期までは厚真川上流方向に対し、17 世紀頃に東西方向に変容を遂げる。またシカ送り儀礼についても現在のアイヌ文化や伝承には存在していません。常に文化は変容し続けるということも、アイヌ文化にもあると言えます。

【活発な交流交易活動】

出土品の多くは本州や大陸からもたらされたものが多い。これらは想像以上の活発な交易活動で入手したものです。「中世」という画一した体制成立以前の混沌とした時代に適応し、躍動感のある民族文化とも言えるかもしれません。

この状況は本来のアイヌ文化の姿と言って過言ではないと思います。だからこそ、北海道の先住民族であるアイヌ民族の歴史から学ぶべきものが数多くあるのではないのでしょうか？



11・12 世紀の厚真への代表的なモノの流れ